
更新されていません。

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

更新されていません。

【Nコード】

N0796S

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

正式タイトル「この連載小説は未完結のまま約半年以上の間、更新されていません。今後、次話投稿されない可能性があります。ご注意ください。」。クライマックス直前で更新の途絶えてしまった連載ホラー小説。1年近く経って突如作者から「どなたか完結させてください」と作者ページへのログインがフリーにされた。続々「完結編」が書き込まれていくが……。

01 無形人間「最終章 その1」(前書き)

メッセージ：片桐さま。犯人教えてください。(http://n
code.syosetu.com/n4885k/)

01 無形人間「最終章 その1」

遺体が運び出された後の霊安室に長身の男が入ってきた。一見ひよる長く見えるが、肩幅は広く、鋼鉄の芯が入ったように硬くまっすぐな、黒いシルエットの主は、刑事の黒沢だ。

そぎ落としたようなシャープな細い輪郭の中に昆虫を思わせる真っ黒な瞳の目をぎよろつかせ、黒沢は室内を見渡し、天井の隅からこちらを見下ろす監視カメラのレンズをじっと見つめた。まるで、

……レンズを通してモニターを見つめている人物を見ているように。

「おい」

黒沢は固い金属質の声でカメラに呼びかけた。

「マイクも仕掛けてあるんだろう？ そのカメラの映像がそっちで差し替えられるように細工されてるのは分かっているんだよ。暗いモニターじゃ分からねえだろうがな、前に来たときに壁にちよつとしたイタズラ書きをしておいたんだよ。ほら」

黒沢は、監視カメラから見て奥の、入り口ドアの右側の端の柱のところへ行き、ここだ、と指さした。

「よく見る。分かるか？ 「ザマアみる」って落書きしてあるんだよ」

モニターを、

わたし

はじいっと見た。黒沢の口の端を引きつらせた、ざまあみろ、と勝ち誇った笑いが癪にさわる。

たしかに、「ザマアみる」と書かれているようだ。

モニターの中の黒沢が丁寧に解説してくれる。

「差し替えられた映像にはこのイタズラ書きが無い。ハードディスクに記録された監視映像を調べ、そこからあんたがそうやって監視

カメラを盗み見している時間が割り出せる。いや、あんたがここを出入りした時間が特定できる。切り替えはリモコンで出来るんだろ？ 既にあんたのスケジュールと照らし合わせて裏は取ってある。あんたは自分の部屋にいたと証言しているが、本当はここに来ていたんだろ？

だが、ここはただの玄関だ。

あんたのいる「地下」への出入り口があるんだろう？

おい、どこだよ？ 教えろよ？」

わたしは、黙っている。

「ちつ、だんまりかよ。ま、わざわざこっちにスピーカーを付ける必要はねえだろうからな。ま、いいさ、見当はついている」

黒沢は薄暗い照明の中、手前に歩いてきて、「神棚」の中を探った。

スイッチがひねられ、奥のロックが外された。

「ビンゴ。カプセルホテルの中じゃなくて助かったぜ」

神棚全体が一段前に飛び出し、左を軸に回転して、「ドア」が開かれた。

「さあて、じゃ、そっちに行かせてもらうぜ」

黒沢はコートの中から真つ黒な拳銃を取り出してこちらに振って見せた。抵抗すれば痛い目を見るぞ？という脅しだ。

ふん、勝手にするがいい。

地獄へ、ようこそ、だ。

黒沢は銃を前に構え、慎重に、コンクリートの階段を下りだした。意外に深い階段に灯りはなく、ずうつと下に、廊下の先から暗い明かりが差している。

それはまるで、地獄の監獄への入り口のようだった。

02 ネット小説作者

佐藤浩樹（こうき）は高校2年生。
誰にも秘密にしているが、

リュウ・ライター

のペンネームでネット小説を書いていた。
ホラー小説ばかり書いている。

自分でもあまり明るい方とは言えず、決して社交的な方ではなかったが、それなりに友だちもいたし、表立っては「ふつうの高校生」だった。ホラー小説なんかを書いているのがふつうの高校生ではないとはあまり言いたくもないが……。

浩樹には特に仲のいい、「親友」と呼べる友もいた。同じクラスの

田中大介。

大のホラーファンであるところが浩樹と親友であるゆえんだ。二人でホラー談義に盛り上がっていると周りの奴らから「気持ち悪いいなー」と嫌がられるが、まあ半分冗談だ。程良く女子を怖がらせる小ネタはないかとねだられたりする。

大介はホラーファンの浩樹から見ても相当のマニアだと思う。浩樹はあんまりグロテスクな物や殺伐とした物は苦手だが、大介はとりあえずホラーならなんでもオーケーで、まずは見るなり読むなりして浩樹に批評を聞かせてくれる。浩樹にとってはホラーのデータバンクとしても重宝な友人だ。

二人のルックスは浩樹がひよろつとしてひ弱な感じで、大介がちよつと太り気味で、ルックス通り二人とも運動は苦手だ。

朝登校してきた浩樹は、先に来ている大介を見つけてさっそく呼びかけた。

「大介君」

二人は互いに君付けで呼び合う。なんとなくオタクっぽいのが、呼び捨てというのは二人にとっては何となく軽薄な感じがして嫌なのだ。

「きのう「小説を読もう！」見た？」

「小説を読もう！」とは

約105,998作品の小説が無料で読める小説サイト

であり、掲載される小説は

すべて「小説家になろう」に投稿された小説を紹介しており、「小説を読もう！」は小説家になろうが直接管理する読者向け小説サイト

である。

「小説家になろう」とは

日本最大級の投稿型小説サイト

であり、

小説を読みたい方や、アマチュア作家、オンライン作家、小説サイトを管理の方、プロ作家、出版社、小説業界の方までみんなのための小説サイトです。

小説を自由に掲載したり、掲載された小説を無料でお読みいただ

けます。

なのである。

実は浩樹が「リュウ・ライター」の名前でホラー小説を投稿しているのもこのサイトである。

「きのう「小説を読もう！」見た？」

と訊かれた大介は

「うん。見たよ」

と答えた。

「小説読もう！」では投稿小説をジャンルごとに検索して読むことが出来、二人はもちろんもっぱらホラーばかり読んでいた。

アマチュアの書く物だからそこはご愛敬だが、中にはたまに「ブルツ」と震えの来るような本格的な作品もある。

浩樹はちよつとばかり興奮しながら

「「無形人間」は見た？」

と訊いた。大介は

「うん。見たよ」

と答えた。

03 未完のホラー小説

「無形人間」。

たぶん「むけいにんげん」と読むのだろう。

は、「小説を読もう！」に連載されていた長編ホラー小説だ。

およそ1年前だ、ほぼ毎日のように更新され、医学や警察捜査の確かな知識に裏打ちされたりリアルな描写で不可解な連続殺人事件を、異様、と呼んでいい迫力で描いた、かなり恐いホラー小説だった。浩樹など同じ場で作品を発表している者としてその上手さに感服し、ひよっとしてプロなんじゃないか？と疑ってさえいた。

アクセス数も硬派のホラー小説としてはかなりあったと思う。

それだけの人気作が、いよいよ真犯人の正体が明らかになる、という最終章に取りかかった途端、突如、ぱったり更新が止まってしまった。

それまでも2、3日間が開いたことはあったので、いつ再開されるかと、真犯人はいつたい誰なのかと、浩樹はじりじりした気持ちで更新を待っていた。

当時、まだ高校に入学して間もなく、別々の中学校で面識もなかったが同じホラー好きと分かって仲良くなったばかりの太介とも犯人は誰か？、とうてい人間業とは思えない殺人を成した犯人の秘密は何か？、かなり熱中して議論したものだ。

こうして更新を待っていた者はたくさんいたはずだ。

それなのに、

連載はストップしたまま、けっきょく、続きが更新されることはなかった。

多くの愛読者が失望し、怒りさえ感じたと思うが、作者からなんのコメントも発表されなかった。

浩樹は下手つぴいなホラー小説を書いては投稿し、たいした読者も獲得できず、評価もされず感想も送ってもらえず、がっかりしながら、今でもたまに「無形人間」のことを思い出した。あんなすごい、恐いホラーを書けたらいいのに、と目標にしながら、犯人は誰で、何物だったのだろう？と、明かされない答えに身悶えするようないがした。

もし自分もあんなすごい作品を書けたら、その時は、大威張りで大介に自分の「リュウ・ライター」としての正体を明かし、作品を読んでもらおうと思った。……大介の批評はかなり辛口なので今はとても自分の作品の評価を聞く気にはならない。「小説を読もう！」の話をしていたまに自分の作品が口にされるとドキリ！とする。幸いというかなんというか、まだまだ大介がともに批評するレベルには達していないらしく、さらりとスルーされてしまう。

半年以上、もうほとんど1年近く放置されていた「無形人間」に、昨夜、突如動きがあった。

「小説家になろう」に登録すると自分のユーザページが持て、ログインして開くと、自分が「お気に入り登録」している作者が何か更新するとその情報が表示される。

昨夜風呂から上がって、自分の作品に感想でも送られていないか虚しい期待をしてログインすると、「お気に入りユーザ活動報告」に

・完結編を書いてください 04/xx 20:00 (桐山容堂)

とあった。

「桐山容堂」は「無形人間」の作者の名前だ。

浩樹は驚いてその見出しをクリックした。

・完結編を書いてくださいー桐山容堂

どなたか「無形人間」の最終章「完結編を書いてください。
この作品にログインするためのIDとパスは

I D = Z U P A S S = 2 0 1 2 E N D

です。

どなたか、読者を驚愕させる事件の真相と真犯人を想造し、物語
を完結させてください。

意欲ある作者の挑戦をお待ちします。

「どういつことだ?.....」
浩樹は驚き、困惑した。

04 何が作者に起こったか？

「どういふことなんだろうね？」

いろいろ想像できるが、答えは決められない。浩樹は大介の考えを聞いたかった。

いろいろ想像できるのは、

そもそも更新が止まってしまってから大介とあれこれ考えた。

作者に何かあつて……、病気をしたとか、怪我をしたとかで、書けなくなった。

解決が思いつかずに書くのを諦めてしまった。

大まかに言つてこの二通りだろう。

事情があつて書けなくなったのなら残念だし、作者にも気の毒に思う。

でも、自分の作った問題を自分で解けないで放り出してしまったのならがっかりだ。

どちらも同じくらいの可能性で考えられたが、作品のファンであった浩樹は是非一つ目の事情であつてほしいと思う。

でも大介は当時から二つ目の事情を疑っていた。

「だつてさー、合理的な犯人なんて分からねえもん」

と、さんざんホラー映画を見てホラー小説やホラーマンガを読んでいるマニアの大介は、真相と真犯人を自分の知識の中の様々なパターンから推理したが、どれも納得のいく答えには至らなかった。

この時浩樹は大介の豊富なホラーの知識に驚かされたものだ。

大介は自分の知識で分らない設問に、

「答えなんかねえじゃん」

と、プンプン憤慨した。そんなに本気になつて素人の書いたネッ

ト小説の謎を考えている姿に笑ってしまったが、「無形人間」にはそれだけのリアルな力があつた。この時は浩樹もまだ「最終章」の再開に大いに期待を残していたのだが……。

大介が疑うのももつともなのだ。

「無形人間」には作者自ら

「事件の最後には驚愕の結論があなたを待っているはずですよ。」

と、思わせぶりたつぷりにアナウンスしている。

そう自信満々に言うだけあつて事件の様相は不可解だ。

状況的に限定された中で、犯人もある程度の範囲に限定され、なおかつ犯行は人間業とは思えない凄まじいもので、登場人物と犯人像が結びつかないのだ。

催眠術による「火事場の馬鹿力」にも言及されているが、「大男のプロレスラーでもなければ絶対に無理」と肉体的に限定し、誰かの安っぽいB級作品のように「催眠術師自身がモンスター」みたいなくだらない真相はこの作品に限ってあり得ない。警察の捜査のリアルな描写と共に、法医学的にも具体的な言及がされて、犯行は「あり得ない」ものののだ。これが実は「人外のモンスターの仕業です」なんて事になったら抗議の感想が殺到したことだろう。

「どういふことなんだろうね？」

という浩樹の質問に、大介は、

「面白いことになったよな？」

と、ニヤリと笑った。

05、「無形人間」ここまでの話

「無形人間」の舞台になるのは現代的な総合病院だ。

荒海を見下ろす寂しい断崖の先に建っている。

建ってから10年も建っていない新しい大きな病院だが、実は前身の病院があり、この地の歴史に暗い影を落としている。

前身の病院は日中戦争の始まる前年に建てられた当時最新鋭の精神科専門の病院だった。

アメリカから輸入された最新鋭の科学的治療法で、迷信的な偏見から患者たちを守り、彼らを正常な状態で社会に帰還させることを期待されたが、時代が悪かった。

病院は軍の管轄となり、入院患者たちは軍事的秘密実験の実験体として利用された。

どのような恐ろしい施術がされたのか、記録はない。

ある時患者たちの暴動が起こり、火災が発生、当時の院長以下数人の医師と看護師が患者たち全員もろとも焼死した。

少数の生き残りの証言によれば、監督していた軍の将校が秘密の漏洩を防ぐため出入り口を封鎖し、燃え上がる窓から逃げようとした患者は撃ち殺して外に出さなかったそうだ。

医師や看護婦の多くは、火災以前に恨み重なる患者たちによって殺されていたらしい。

そうした呪わしい歴史を持つ病院は、火事で焼け落ちた後閉鎖され、更地にされ、それから数十年、放置されていた。

そこに病院の欲しい地元の要請を受け、新しく総合病院が建設された。もつともこの地の歴史を知る年寄りからは何もわざわざここに建てなくても反対の声が上がったが、用地費用の関係などからここに決定されてしまった。

殺人事件は突如起こった。

夜中入院患者の若い女性が残虐……どころか、とても人間業とは思えない暴力的な方法で殺害されたのだ。

警察の調べで、廊下の監視カメラには犯人らしき人物の姿が映っている。

真っ黒いビニールコートを着た、性別の分からぬ普通体型の人物だ。

被害者の若い女性は男女関係にだらしないところがあつて、警察は怨恨の線で容疑者を割り出そうとする。

一方で犯人がどこから病院内に侵入したか、侵入及び逃走ルートが問題となる。病院はあちこちに監視カメラがあり、カメラの目をかいくぐり、かつ電子ロックのドアを解錠するのは内部の事情に詳しい限られた関係者しか考えられない。

まだ警察の監視の中にある病院内で、第2の殺人が行われる。

今回も被害者は若い女性で、今回もまた人間業とは思えない残酷な殺され方をしている。

被害女性は旅行者で、連れのいない一人旅だった。ちょっとした事故に遭い、昨日救急車でたまたまこの病院に搬送されてきたのだ。

前回と同じ手口で、特にこの被害女性個人に恨みがあつての犯行とは考えづらく、犯人は若い女性全般に恨みを持つサイコ的な人物である可能性が高まる。

今回もまた犯人の侵入逃走ルートは不明で、ますます病院関係者への疑いが強くなる。

病院に隣接して院長の邸宅が建っている。そこに住む院長一家……院長、院長夫人、その息子の医師、部屋に引きこもって姿を見せない大学生の娘、そして病院の、訳ありの警備員、警察も入室を禁じられる特別病室の入院患者、などが容疑者として浮上する。

ちまたでは「精神病院の実験室」の噂が囁かれる。

消失した病院には秘密の地下室があり、そこで決して表沙汰に出来ない秘密実験が行われていた。火事の際、焼死したと言われている医師たちが、実はその秘密地下室に逃げ込んで生き延びていたというのだ。

馬鹿げた都市伝説に思われたが、病院を調べていた刑事は配管や送電線が病院とは別系統で地下へ引かれていることを発見する。

果たして、「イタズラ書き」によって霊安室に「地下室」への出入り口があることを突き止めた刑事は、ついに、事件の真相を知る

と思われる人物の元へ、階段を下りていくのだった。

.....。

06 ウォンメール

大介は

「面白いことになったな？」

と笑った。

「作者の桐山容堂って52歳のおっさんだっけな？」

「えっ？ 本人が分かってるの？」

「違うよ」

大介は鈍いなあと呆れた顔で浩樹を見た。

「浩樹君、「桐山容堂」のユーザページにログインしてみなかったのか？」

「いや、してないけど……？」

浩樹もしてみようか迷ったが、なんだか悪い気がしてしなかった。

……代わりに………。

呆れた顔の大介は言う。

「俺はしてみたぞ。確かにユーザページにログインできちゃったぜ？ ユーザ情報登録もそっくり残っていてさ、メールアドレスも生年月日もばっちりでさ、律儀に職業まで書き込んであったぜ？ 52歳の地方公務員だっけさ。もしかして本当に警察官だったりしてな？ あの捜査の描写なんてさ、テレビドラマで集めた情報にしちゃ詳しすぎたもんな？ もしかして連載が打ちきりになったのって、職場で小説書いているのがばれて、書くのを禁止されたのかもな？ ひょっとして、本当の事件をモデルにしていたりしてな？ そうだったら面白えよな？ いやひょっとすると本当にさ、本当の事件をモデルにしている、捜査が行き詰まって未解決になってるんじゃないか？ 世間的には知られてなくても警察内部では有名な未解決事件かも知れないぜ？ 本当に事件が解決してなくて、犯人も分からないで、だから解決編が書けないのかもな？」

しゃべりながら大介は興奮して頬を紅潮させた。本当に楽しそう

だ。

「まさか」

浩樹は暴走気味の大介の推理をやんわり否定した。

「そこまで迂闊なことはしないだろう？ 生年月日とか職業なんて本当かどうか分からないじゃないか？ きつと嘘を書いてるんだよ」
「でもさ」

大介はちよつとムツとしたように反論した。

「メールアドレスはフリーメールじゃないぜ？ 電話会社で契約したものだぞ？」

「そうなの？」

浩樹は驚いた。そこまで迂闊に自分の個人情報公開してしまった、「桐山容堂」は何を考えているんだろう？

浩樹は考えた。

「1年近く経つて、なんで今頃こんなことをしたんだろう？」

……あれ、本当に「桐山容堂」本人が書いたものなのかな？」

「うん？ どういうことだい？ ログインするIDとパスを公開する前に他人が外部から書き込むことなんて出来ないだろう？」

「いや、他人じゃなくてさ。……例えば、本人はやっぱり重い病気に掛かって、ずうつと入院していて、それで続きが書けなかったんだけど、いよいよ危ないって状態になって、奥さんとか家族に、実は俺はこういう物を書いていて、肝心のクライマックスで打ち切り状態になってしまっている、残念ながら俺にはもう書けそうにないから誰かに書いてもらえるようにしてくれないか？、って頼んだりしてさ？」

「ああ、なるほどなあ……。浩樹君、冴えてるじゃん？」

ホラーマニアの大介が浩樹の意見を褒めることはたまにしかない。こんなに感心されたのは初めてで、浩樹は嬉しくて照れてしまった。ごく当たり前の推理だと思うが、大介はあたら余計な知識がありすぎて考えが突飛に走り過ぎなのだ。なるほどなあと感心して大介は浩樹の推理を更に進める。

「じゃあその家族はインターネットなんかには詳しくないんだな。迂闊だもんなあ。桐山容堂自身それを確認できないくらい容態が悪いんだろうなあ。」

……誰か完結編を書いてくれるのを、いまわの際のベッドで今かと待ちわびているのかもなあ……………」

大介はしんみり言つて、じいつと浩樹の顔を覗き見た。

「浩樹君、君、書いてやれよ？」

「えっ、」

浩樹はドキツとした。実は書けるものなら書いてみたい、とは思ったのだ。まあ今までさんざん推理して、さっぱり分からなくて、今さらこれだ！と思える答えが思いつけるわけないとすぐに諦めたが……。

大介は真面目に悩む浩樹を笑った。

「わはは、脈ありだな？ 本当に書いてみるよ？」

大介の笑顔に先ほどの老作家？を思いやる暗い陰は微塵もなく、

「なんだよー、からかったな？」

浩樹は苦笑いして、お返しに言つてやった。

「そう言う大介君が書けばいいじゃないか？ ホラーマニアの名に懸けて、もう1度真剣に考えてみるよ？」

「さあな、どうしよつかない？」

大介も案外その気があるようで、頭の後ろに手を組んでうそぶいた。

「ま、誰かがどの程度の物を書くか、まずは見てみないとない」

休み時間、浩樹は急いでトイレに行つて個室に入った。

携帯電話で「小説家になろう」にアクセスし、「桐山容堂」のIDとパスでログインした。本当にログインできてしまい、浩樹はネット犯罪に手を染めているようにドキドキした。

「あつた……」

昨夜、「活動報告」を読んだ浩樹はその内容に驚き、「作者宛メッセージ」に桐山容堂宛ててメッセージを送ったのだ。今、ここに開いている。

送信者 リユウ・ライター

件名 一ファンです

日付 201×年 04月 ××日(Wed) 22時33分27秒

はじめまして。僕もホラー小説を書いているリユウ・ライターと申します。

あなたの熱烈なファンです。

「無形人間」の更新停止は本当に残念でした。

活動報告のメッセージにも衝撃を受けました。

僕は本当の犯人と真相が知りたいです。

人任せになんかしないで、どうかご自分で完結させてください。待ってます。

作者宛メッセージはログインした作者しか読むことが出来ない。

それで浩樹は活動報告の記事へのコメントではなく、こちらにメッセージを送ったのだが……。

浩樹のメッセージは既に誰かに開けられていた。

どうもそれは桐山容堂ではないように思う。

浩樹は何となく後ろめたく感じてログインをためらったが、きつとすぐに何人もがログインしたに違いない。

知りたがり的大介も当然読んだだろう……。

そうだ！、と思いついて浩樹はまたギクツと胸が痛くなった。

大介には自分が「リユウ・ライター」であることを明かしていない。

これまでの会話でお互いに「ユーザページ」を持っていることは察しがついていたが、そこは「君」付けで呼び合う仲、お互いのプライバシーは尊重してあえて訊かずにきたが、「桐山容堂」の「逆お気に入りユーザ」の中に浩樹のユーザ名があるのは容易に想像のつくところで、大介には浩樹の「リユウ・ライター」の正体がばれてしまった可能性が高い。……まったく、桐山容堂も罪なことをしてくれたものだ。今さら「お気に入りユーザ」を取り消しても自分が「リユウ・ライター」であったことを白状するようなものだし……。いや、考えてみれば自分の作者ページでお気に入り登録している作家は「非公開」にしていらないから意識して見ればとつくにばれていたか……。

浩樹は今さらながら大介がさりげなく「リユウ・ライター」の作品の批評をスルーしていた意味を思い知った。まったく迂闊だった。もう一度自分の送ったメッセージを読んだ。恥ずかしくて顔が真っ赤になってしまふ。

削除した。

「ユーザ情報編集」を開く。

なるほど生年月日もアドレスも丸分かりだ。まあ生年月日は公開している作者もいるけれど。特に若い女性なんて不用心だなあと思う。ちなみに桐山容堂はA B型だ。

浩樹はもっぱらパソコン派で携帯電話で文を打つのは苦手だ。時間を気にしながら桐山容堂のアドレスにメールを送った。

送信者 コウキ

件名 ファンです

自分で完結させてください

ふう、と息をつき、鳴り出したチャイムに慌ててトイレを出た。

07、「無形人間」完結。

帰宅した浩輝はパソコンで改めて「桐山容堂」のユーザページにログインした。

「桐山容堂」を「お気に入り登録」しているユーザは18人いた。もちろん「リュウ・ライター」も入っている。浩樹の「リュウ・ライター」などお気に入り登録してくれているユーザはたったの二人だ。二人とも浩樹から作品に感想を送った作者で、まあ「お友だち」だ。

この18人に昨日の「活動報告」の情報が送られ、浩樹以外の17人がログインした可能性が高い。浩樹はログインしなかった自分のお人好しぶりが馬鹿らしくなった。

大介のユーザ名もこの中にあるはずだ。これだろうという目星はつくが……。

昨日の時点でログインした可能性があるのはこの17人くらいのものだろっけれど、このことが話題になればログインする人間はどんどん増えていきそうな気がする。

残念なことに桐山容堂自身がお気に入り登録している作品や作者はない。

1週間ほどが経って、とうとう「無形人間」の「完結編」が更新された。

新たに更新された「最終章 その2」の前書きにこうあった。

前書き：

読者の皆さん今晚は。カンニング・レクサーと申します。

僭越ながら「解決・完結編」を書かせていただきましたのでどうぞお読みください。

「カンニング・レクサー」という名前は「桐山容堂」の「逆お気に入りユーザ」の中になかった。ふざけた名前で、たぶん「羊たちの沈黙」の「ハンニバル・レクター」をもじったものだろう。「逆お気に入りユーザ」の一人と思われるが、「完結編」発表後の反応が怖くて「偽名」を使ったのだろう。ペンネームの偽名というのも変だが、プロの作家だって変名で作品を発表したりするからまあいいだろう。

問題は、提示された難問にどのような解答を与えているか？だ。

「カンニング・レクサー版」の「完結編」はだいたい次のようなものだった。

犯人は部屋に引きこもっている女子大生の娘だった。

しかし部屋に引きこもっているのは全く別人の精神病患者だった。本物の娘は秘密の地下室に隠れ住み、地下に下りてきた刑事を隠し通路から現れて襲うが、射殺される。

娘は性同一性障害で、男性化の施術を受けていたが失敗し、筋肉の固まりのようなモンスターに変身していた。

娘は「男性的な」欲望で若い女性の入院患者を襲ったが、抵抗されて殺してしまったのだ。

隠しカメラを細工して娘を守っていたのは父親の院長だった。

「完結編」が更新された翌日、さっそく大介が手厳しい批評をくわえた。

「筋肉の固まりのモンスターって、それまでのリアリティーが台無しだよな？ 性同一性障害って今いろいろ話題になるけどさー、それを持つてくるのも安易だよな？ まあ引きこもりの娘を第三者が確認したエピソードはないから、そこだけ目の付け所は良かったかな？」

といった調子だ。更新されたのは夜9時頃だが、朝見てみたらさっそく5件も大介と似たような手厳しい批評の感想が書き込まれていた。

浩樹自身も、自分が考えるよりましかなとは思っけれど、あまり感心するような完結編ではなかった。

やっぱりそれまでの異様に怖いリアリティーから遊離していて、がっかりした。

これはとうてい「無形人間」の完結編としては受け入れられない。「さあて、どうなるだろうな？」

大介は「カンニング・レクサー」を小馬鹿にした意地悪な笑いを浮かべて言った。

どうなるだろうな？

その意味するところは浩樹には分からなかったが……。

08 削除

帰宅して「無形人間」を開くと、「カンニング・レクサー」によって書かれた「完結編」がすっかり削除されていた。

夜遅く寝る前にもう一度開いてみると、「桐山容堂」の「活動報告」が更新されていた。

タイトル：抗議

どうして削除するんですか？ひどいじゃないですか？

ああ、そうなのか、と浩樹は思った。「完結編」を削除したのはカンニング・レクサー本人じゃなかったんだ。気に入らない別の誰かが意地悪をして「削除」したのだ。

誰でもログインできるのだから、誰でも更新できる一方、誰でも削除できるのだ。

大介が「どうなるだろうな？」と意地悪に笑ったのはこういう事だったのだ。

浩樹は「荒らし」と同じような状態になることを思っ嫌な気分になった。

一方で、

「でもあの完結編はなかったよなあ……」

と思うから、怒っているカンニング・レクサーにもあまり同情的な気持ちにもならなかった。

まあ放置するのもかわいそうなので、

「カンニング・レクサーさん。ご自分のページで発表し直してはいかがですか？」

と、コメントしてやろうかと思ったが、作者宛メッセージを誰かに覗き見られた恥ずかしさを思い出してよし。
本当にどうなるのかなあ？……と、浩樹も思った。

4月××日。

富山県。市の国道沿いの歩道で、10代の男性が死んでいるのが早朝犬の散歩をしていた近所の住人によって発見された。

警察ではこの男性が夜の間になんらかの事故に巻き込まれたものと見て身元の確認と共に捜査を行っている。

「まあ、あれだな、当然そうなるだろうな」

完結編が削除されたことを大介はそう論評した。

「でもちよつとかわいそうだね？」

浩樹がカンニング・レクサーの「抗議」を思つて言うと、大介は「フフン」とまた小馬鹿にしたような笑いを浮かべた。

「相変わらず甘いねえ浩樹君。誰でも自由に書き込めたり、削除したり出来るんだぜ？ ひよつとしたら削除したのがカンニング・レクサー本人かも知れないし、活動報告を書いたのがカンニング・レクサーじゃないかも知れないぜ？」

「ええ？」

浩樹は混乱した。

「まあ…、可能性としては、可能だけどさ？ どうして？ なんの意味があるの？」

「面白いからじゃん」

と、大介は面白がつて言った。

「寄せられた感想じゃだいぶやられていただろう？ 自信をなくした本人がいじめて自分の書いた分を引つ込めたのかも知れない。それを見た誰かさんが「かわいそうなカンニングくん」を慰める…つか、からかつて？、「ぼくちんをいじめないでくださ〜い」つて哀れっぽく訴えてやったのかも知れないぜ？」

「ひでえ奴だなあー」

と、浩樹は面白がつてひどいことを考える大介に言った。

「だからさ、分からないじゃん？ 疑えばいくらでも疑える余地があるんだからさ、憶測が憶測を呼んで疑心暗鬼を招く……なんて深刻に考えなくてもさ、なんか盛り上がってきたじゃん？ とにかく更新されて再び「無形人間」が新着リストの1ページ目に登場してお気に入り登録してなかったファンも「おっ！」って注目したはずだぜ？ これからこのイベント、盛り上がってくるんじゃないか？」大介は、ヒヒヒ、とホラーチックに笑った。

それから数日後、次の「完結編」が更新された。

09、「完結編」サイコバージョン

次に「完結編」を発表した作者も前の「カンニング・レクサー」に倣って前書きで名乗っていた。

「わたくし、星輪クラリス の書きました解決編を どうぞご賞味くださいませ。かしこ」

女性らしいが、なんか気取っていてムカつく。「星輪クラリス」ってどういうペンネームだろう?と考えたら、「クラリス・スターリング」だ。ハンニバル・レクターから「羊たちの沈黙」つながりだ。「星輪クラリス」もそういう名前で作品を発表している作者はいなかった。

星輪クラリス版「解決編」はだいたい次のようなものだった。

犯人は病院で外科の医師をしている兄と部屋に引きこもっている妹の兄妹共犯だ。

最初の犠牲者である入院患者と担当医師の兄はお互い引かれ合い、恋人関係になっている。

しかし実は医師は極度のシスターコンプレックスで、入院患者の女性と恋人関係になったのは妹との危険な関係に溺れるのを避けるためだった。

次第に医師のシスコンぶりに気づいた女性は医師を馬鹿にした態度を取って医師をカツとさせる。

一方引きこもりの妹は、自分の容姿に自信がなく、遠く離れた地の大学に進学するのを機に大胆な整形手術を受けるが、これが手術中のトラブルで大失敗し、とても正視できない醜い顔になってしまう。

妹は顔が変わってしまったショックで人格が分裂気味になり、夜中夢遊病になって室外をさまよい歩く。邸宅をさまよっていたはずの妹「レインコート」の人物は何故か病院内に現れるが、それは秘密の地下室が邸宅にもつながっていたからだ。

妹は兄の恋人の病室に現れ、恋人の女性はその「化け物」が恋人のシスコン相手の妹だと知り、嫌悪感を露わにする。激高した妹は女性を襲い、異変に気づいた兄が駆けつけたときには事既に遅く、女性は首を絞められ絶命していた。元の人格に戻った妹は自分のしてしまったことに激しく怯える。妹をかばうため兄は「女性には絶対不可能な状態」にするため遺体を二人で力を合わせて折り畳む。

自分に「兄妹」以上の好意を見せる兄を妹はいったん拒否する。しかし実は妹が顔を変えようと思ったのは兄から離れるためだったのだ。妹も心の内では兄を恋していたのだ。

妹は兄の愛を受けるため再び若い入院患者を殺してしまう。二人は再び力を合わせて遺体をあり得ない状態に折り畳み、「愛の共同作業」を経て二人は結ばれる。

二人は秘密の地下室を二人の愛の巢にして行為にふけるが、異常な関係は二人の精神をむしばんでいく。

地下に下りてきた刑事を兄が襲うが、ピストルで返り討ちにされ、刑事が奥の部屋を見ると、ベッドの上に折り畳まれた妹の死体が載っている。

なんともはやなストーリーで、後味が悪いったらない。

「怪力のレスラーでもなければ不可能な死体の状態」を「二人で力を合わせて」というのが、きっと本人はグッドアイデアと悦に入っているのだろうが、短絡的だ。1足す1は2って、そもそも殺人自体は「単独犯」が条件だ。部屋を出たり入ったり、それこそ監視カメラに兄の姿がばっちり映っているはずだ。

作風も全然違う。抽象的な言葉の羅列で、ポエムっぽく、耽美だかなんだか知らないけれど、すっかり妹の女性的なメルヘンな世界になってしまっている。登場キャラクターより作者が「サイコ」なんじゃないかと疑ってしまう。

ああ、こういう作風の若い女性ホラー作家っているよな、実は中学生だったりするんじゃないか？

と、ハードなホラーのファンの浩樹は読みながらすっかり腹を立ててしまった。

あんまり腹が立ったので怒りを込めて「感想」を書き込んでやるうかと思ったが、こういうサイコ系の作者の恨みを買って逆に自分の作品にめちゃくちゃな感想を書かれるかも知れないと思うと怖い気がして、止そうかと思ったが、ふと、悪いことを考えてしまった。

「小説家になろう」の初期設定では登録ユーザからしか感想を受け付けないようになっていたが、「小説情報編集」で「感想受付」を（制限なし）に設定することが可能だ。

「桐山容堂」のユーザページにログインして確かめると「無形人間」の感想受付は（ユーザからのみ）に設定されていた。

浩樹はそれを、

（制限なし）

に設定し直した。

そして、いったんログアウトし、「ホラーファン」の名前で大好きな「無形人間」のリアルでハードな世界観をぶち壊しにした「星輪クラリス版完結編」を激烈に非難する感想を書き込んで、送った。

浩樹は、自分がなんだかすごく悪い人間になった気がした。

翌日見てみると、「無形人間」には浩樹が書いた以上に激烈な非難の感想がどつと書き込まれていた。そのどれもがログインしていない「変名」での書き込みだった。

浩樹のせいでは、「無形人間」を巡るネットのモラルはすっかり崩壊してしまったようだ。

10、「完結編」モンスターバージョン

5月×日。

埼玉県。市のアパートで、このアパートに部屋を借りている会社員望月美奈代さん（33）が無断欠勤を続けていることを不審に思った会社の同僚が望月さんのアパートの部屋を訪れたところ、中で女性が死んでいるのが発見された。女性は何者かに殺害されたと見られ、警察では殺人事件として捜査する一方、発見された死体を望月さんを見て身元の確認を進めている。

また新たな「無形人間」完結編が発表された。

今度は作者の署名はなく、ファンの浩樹は一瞬ろくでもない完結編ばかり書かれた本物作者が業を煮やしてとうとう自分で完結編を発表したのかと期待したが、それは前にも増してひどい出来のものだった。

仮に「モンスターバージョン」とする完結編は次のような代物だった。

犯人は秘密の地下室に潜んでいた、大戦中の実験で生み出された不死身のモンスターだった。

……ま、

要約も何も、それだけの内容だった。

それまでの伏線も謎解きも全く無視で、刑事の銃弾を食らっても死なないつぎはぎだらけのモンスターが、刑事を惨殺し、病院に現れて医者も看護師も入院患者も手当たり次第に殺しまくり、たった一人だけ自分を理解してくれる引きこもりの娘と共に地下室に戻り、さらに断崖の下に開く秘密の抜け穴から外へ脱出してどこへともなく消えていく……という、ストーリーも何もないクソだった。

前の「カンニング・レクサー」や「星輪クラリス」には偏向しながらも自分なりに「無形人間」へのリスペクトが感じられたが、これには原作に対する愛情や尊敬が全く感じられない。

前にも増して激怒した浩樹は今度こそまったく曇りのない怒りを込めて大抗議の感想を送ってやるうとしたが、

とんでもないことになっていた。

翌日怒りの収まらないまま大介に会うつと、大介は相変わらず皮肉屋を気取った不愉快な笑いを浮かべて

「やられちまったな」

と言った。

そうだ！

まったくもって、

やられてしまった！

あの馬鹿な「モンスターバジョン完結編」を書いた作者は、「感想受付」を「受け付けない」に設定し、それどころか、なんということか、ログインパスを変更し、他のユーザがログインできないようにしてしまったのだ！！！！まったくなんたる暴挙か！これでは「桐山容堂」本人だって自分のユーザページにログインでき

なくなってしまった！！

あの偉大な「無形人間」があなくなっただらない最低Z級完結編に固定されてしまったなんて、これは許し難い冒涇行為だ！　しかし

……

浩輝たちファンがどんなに激怒しても、抗議をする場を完全に奪われてしまった。「活動報告」も全て消去され、コメントを残すこともできない。作者宛にメッセージを送ることは出来るが、それは一般ユーザには公開されないの、このクソ作者が無視すればそれっきりのことだ。今のところそれはないようだが「ブロックユーザ設定」という機能もあつて、あんまりうるさいユーザはこれに指定すればそのユーザは「桐山容堂」に対していかなるコンタクトも取れなくなる。ネット上のストーカー行為防止策だが、それがこんな風に作用してしまうなんて、なんたる皮肉だろう！

桐山容堂もまさか自分の仕掛けたイベントがこんな結果を招くなんて思いもなかっただろう。

「こりゃ炎上するな」

と、大介は悪い笑いを浮かべて言った。「炎上」とはブログやホームページが不特定多数の抗議コメントの集中砲火に晒され、まともな機能を失ってしまう事を言うが……

「炎上するったって、完全にシャットアウトしちゃってるじゃないか？　先手を打たれて、攻撃のしようがないよ？」

浩樹は悔しさがぶり返してムカムカしたが。

「「桐山容堂」のページじゃねえよ。あのくっだらねえ完結編を書いた作者自身のページだよ」

「えっ？」

浩樹は……大介の指摘に驚きは半分くらいだった。

「やっぱり……、作者はあいつかな？」

「そっだろう？」

大介はチツと舌打ちするように顔をしかめて言った。

「あんなくっだらねえ物大威張りで公表するなんて、

「ジェイソンXYZ」

しかいねえだろ？」

「ジェイソンXYZ」とは、バイオレンス物ばかり書いている「小説家になろう」の常連作家で、作品数は多いが、どれもこれも似たような残虐スプラッター物ばかりで、作者自身作品の前書きやあとがき、活動報告などで「バイオレンスを書くために小説を書いている」と公言し、「マイフェイバリット」を「13日の金曜日シリーズ。ジェイソンは永遠不滅の神だ！」と公言している。アホだ、とただ暴力を描いただけのホラーとも言えない悪趣味馬鹿作品を嫌っている浩樹は日ごろから見下していた。文章もワンパターンで、誤字脱字だらけで、一つの文章で同じ言い回しを2度3度と繰り返して、表現も幼稚で、相当下手だ。自分より下手糞だ。

「無形人間・バイオレンスバージョン完結編」にはこの「ジェイソンXYZ」の下手つくそな文章の癖があらさまに出ていた。もちろん、畏れ多くも汚らわしく、「ジェイソンXYZ」も「桐山容堂」の「逆お気に入りユーザ」にリストされていた。

この人は救いようもなく自分のお気に入りの世界に没りきってしまっているんだろう。……周りがどんな風に見られているのか全く気づかずに……。

本人はこの不毛な「完結編」闘争に自分の素晴らしい「完結編」で決着を付けたつもりになっているのだろう。

「どういうことになるか、ま、目に見えているけどな」

という大介の言葉は、帰宅して見た「ジェイソンXYZ」の作者ページで明らかとなった。

類似作品（全部そうだが）の感想や、活動報告のコメントは、「

無形人間・完結編」への抗議……というか罵詈雑言が溢れ返っていた。

更に翌日になってみるとジェイソンXYZ本人から「書いたのは俺ではない」というコメントが発表されていたが、「嘘つけバカヤロウ!」「謝って済むか!死ね!」といったようなひどいコメントが押し寄せていた。ジェイソンXYZはコメントの受付をユーザに限定していたが、抗議コメントのほとんどはおそらくフリーメールで開設したばかりのユーザから書き込まれていた。「小説家になる」のユーザになるにはアドレスの登録が必要だが、そのアドレスはホームページサービスのフリーメールアドレスでもかまわないのだ。

まさに炎上したジェイソンXYZのページは更新されなくなり、沈黙した。

浩樹はざまあみろと思う一方、ひどく嫌な気分にもなった。

11 / 「真・無形人間」

5月××日。

神奈川県。市の港湾敷地内で同市の職業不定武藤丈流さん（23）が体を左右に切断された形で別々の場所で発見された。神奈川県警は殺人及び死体損壊遺棄事件として捜査している。

数日経っても「ジエイソンXYZ」は沈黙したままだ。さすがに精神的に堪えたのだろう。

「せっかく盛り上がったのによお、つまんねえ終わり方になっちまったな」

と、面白がっていた大介もすっかりふてくされてしまった。ところが。

「真・無形人間」

という連載小説が発表された。

作者は「霧山洋堂」。

「桐山容堂」と同名異字だ。

浩樹は興奮して作品にアクセスした。

「真・無形人間」は「無形人間」と全く同じ物だった。

ただし「ジェイソンXYZ」によって書かれた「完結編」は掲載されていない。オリジナル同様最終章の「その1」が最後で終わっている。

「前書き」が書かれている。

：読者の皆様お久しぶりです。きりやまようどうです。

「無形人間」があのような形で実質的に終わってしまったて残念です。わたくしも含め納得のいかない読者が多いと思いますので場を改めて「無形人間」を再開させたいと思います。

今度こそ「無形人間」が素晴らしいエンディングを迎えられるよう、意欲ある作者の勇氣ある挑戦を心からお待ち申し上げます。

「最終章その1」のあとがきにはご丁寧な、

：以上。桐山容堂でした。

と、自分が書くのはここまでだと宣言とも取れる挨拶をしている。

「真・無形人間」全31部は、おそらく昼休みに行ったのだろう、12時30分から45分の間に集中的に投稿されていた。夜浩樹が見たときには「感想」にさっそく「待つてました!」「最後まで書いてくれ!」「本当に桐山容堂本人なのか?」と、疑惑を挟みつつもおおむね歓迎のコメントが書き込まれていた。

なんで作者が最後まで責任を持って書いてくれないんだ?

本当に桐山容堂本人が開設したページなのか?

というのは浩樹も感じる疑問だが、とにかく、「無形人間」があるまま終わらなかったことだけは歓迎だ。

翌日登校した浩樹は大介と久しぶりに興奮して「無形人間」改め

「真・無形人間」のことを話した。

「浩樹君、「真・無形人間」のアクセス数見たか？」

「いや。見なかったけど、どんくらい？」

「ユニークアクセスで300を越えていたぜ？」

「小説家になるう」の「アクセス解析」は「ページビュー」と「ユニークアクセス」があって、「ページビュー」は何ページ読まれたかの総計、「ユニークアクセス」は何人のユーザ（パソコン、携帯端末）が読んだかの総計で、「ユニークアクセス」の方が実際の読者数に近い。ホラージャンルの作品は全体的に読者が少なく、フアンタジー系の人気作家の作品には1日ユニークアクセス1000近くを記録する浩樹などから見ればモンスター級の人気作もごく少数あるが、シリアスで硬派のホラー小説に限定すれば、完結直後は別にして1日50アクセスもあれば相当の人気作だ。300アクセスというのはハードホラーとしては異例の数字だ。

「へえー、そんなにあったの？　すごいね」

浩輝は羨望混じりに感心した。浩樹の連載小説など1日10アクセスもあればバンバンザイだ。大介も感心して言った。

「これが最初から仕組んだことならたいした策士だよな？」

「どういうこと？」

「話題作りだよ。イベントとして盛り上げて、さんざん煽った上で、作者が本当の「完結編」を発表したらどうだ？　すげえ話題になって、アクセスが殺到するだろう？　つまらなけりゃバッシングされるだろうけどさ、「無形人間」は最初からすげえ自信満々だったじゃん？　あれだけつまらねえ「偽完結編」を読まされた後で本当に「驚愕の結論」っていう奴が発表されたらさ、「すごい！」「驚いた！」「そう来るとは思いも寄らなかった」「面白い！」「最高！」って、普通に発表するよりずっと注目されて絶賛されるんじゃないか？　当然作者の態度に批判はされるだろうけどさ、「実は本当に病気で長期入院していて書けなかったんです。もう自分で書く気力

が無くなっていたんですが、これだけ支持があるならと奮起させられて頑張って完結させることが出来ました。ありがとうございました。」なんてコメント出せばさ、それはそれで一つの感動的な「いい話」になるじゃねえか？ な？、頭いいだろう？」

なるほどなあと浩樹は大介の考えに感心した。それが事実なら踊らされた自分がいいカモにされている感じでちよつと不愉快だが、まあ、イベントと考えれば参加して踊るのも楽しくていいか。

浩樹は一つ気になっていたことを大介に訊いた。

「霧山洋堂が前書きで「意欲ある作者の勇気ある挑戦を待ってます」って書いてるよね？」「勇気ある」ってどういう意味だろう？」

「そりゃあ、前の3つの完結編がさんざんバッシングされたからじゃねえの？ ジェイソンXYZなんて再起不能みたいじゃん？」

大介は意地悪に笑った。かわいそうに。

「今度はさあ、かなり期待できるんじゃないかねえか？ 完全に挑戦だもんな？ 状況的にも「納得行く完結編が書けるものなら書いてみる！」ってすげえ厳しいもんな？ 書こうって奴は背水の陣で、思いつきり本気の自信作を発表して来るんじゃないか？」

「ふうん、そうだね。誰が書くかなあ？ 楽しみだね？」

今度のログインIDは

ID〓U

J

パス〓1999OVER

だった。

登録メールアドレスは、今度はホームページサービスのフリーメールだった。

12、「悪魔の未完小説」

「真・無形人間」の完結編はなかなか登場しなかった。やっぱりみんなびびって二の足を踏んでいるのだろう。

そんな中、それに関連して別の作者の別の作品が発表された。短編で、

悪魔の未完小説 作者：倉岳拍子

というものだ。

内容はだいたいこうだ。

ネット上に「無限人間」というクライマックス直前で連載の止まってしまった連続殺人物のホラー小説がある。

更新が止まって1年経った日、作者から「誰か完結編を書いてください」と作者ページへのログインが開放される。

まず「人食い博士」が完結編を書くが、「人食い博士」こと男子高校生は夜中何者かに外に連れ出され残虐な方法で殺され、彼の書いた「完結編」は削除されてしまう。

次に「美人捜査官」が完結編を書くが、「美人捜査官」こと30代のOLは部屋に侵入した何者かに殺され頭をもがれて持ち去られ、彼女の書いた「完結編」は削除されてしまう。

その次に「不死身の殺人鬼」が完結編を書いてページのログインをクローズしてしまうが、「不死身の殺人鬼」こと20代のフリーターは何者かに港湾に拉致されて殺されたあげく股から頭まで怪力で引き裂かれてバラバラに捨てられる。

彼の書いた「完結編」は削除されることはなかったが、新たに「真・無限人間」が開設され、新たな作者「新たな犠牲者を待ち受けている」。

その「完結編」を書いてしまうと、「真犯人」が書かれた姿になって現実世界に現れ、作者を書かれたような方法で殺し、自分の姿「小説の完結編を削除し、「無限」の、姿の定まらない殺人鬼となって小説の中に帰っていく」。

次に「完結編」を書くあなたの元へも、きっと真犯人は現れ、あなたの命を奪っていくことだろう。

「ねえ、「悪魔の未完小説」は読んだ？」

登校すると浩樹はいつものようにさっそく大介に話し掛けた。

大介はニヤリと笑った。

「ああ、あの作者の書きそうな話だよな？　ほんと、思いつきでパツと書きちまうもんかな？」

作者の「倉岳拍子（くらたけひょうし）」という作家は、

けっこ古株の「小説家になろう」の常連作家で、たまにファンタジーや童話やミステリーも書くが、8割方ホラー専門で、「霊能力者姫宮魅智シリーズ」という心霊オカルトのシリーズを中心に、やたらと速いペースでけっこ古株な長編をやたら数多く発表している文章からして20代後半からひょっとして50歳くらい？の中高年だろうが、思うに職場で浮いた存在で、現実世界に友だちが無く、小説を書くしか楽しみのない哀れなおじさんのようだ。どうやら本気で「幽霊」の存在を信じている節があり、その点ジェイソンXYZと近い気がする。浩樹もホラー小説なんか一生懸命書いているが、まあ、こういう大人にはなりたくないなあという一つのサンプルの

ような作家さんだ。数多い作品の人気も……一生懸命書いている割には寂しい結果で、同情してしまう。

この人の特徴で、とにかく早書きで、現実の社会的事件をネタとして取り上げることが多い。年寄り臭く若者に説教するようなところがあつてうざつたい。

今回の短編もそうだ。短編とは言つてもだらだら文章が長く、分量はけっこうな物だ。文章量が多いのも年寄りの証拠だ。

「この間横浜で男の「半分死体」事件があつたじゃんか？ それをヒントに、前に似たような事件がないか調べて、「無形人間」の完結編騒動と絡めてストーリーを作つたんだぜ？」「半分死体」なんてさ、ありやどうせやくざの仕業だぜ？ 港だもんな、いろいろな機械があるだろう？ 電動ノコギリでギャリイインつて真つ二つに切つたんだぜ？」

グロなスプラッターも大好きな大介は顔をしかめながら嬉しそうに言った。浩樹は想像してげんなりした。

「被害者のフリーターって、きつとヤクの売人なんかしてたんだぜ？ それで薬をくすねたりして上のやくざの怒りを買つて、見せしめにぶつ殺されたんだぜ？」「股から真つ二つに引き裂かれた」なんて、ほんとジェイソンXYZが喜びそうな描写だよな？ ほんと、思いつきをそのまんま書いちまう作家だよな？」

大介の意見はもつともだと思ふが、浩樹は正直けっこう怖かった。大介は

「これも一種の便乗商売だな。上手いこと考えたなと感心するけどさ、なんかこの作者つて自分の頭の良さをひけらかしている感じがして、読んでてムカつくっていうか、底が浅いんだよな？ いろいろ知ったかぶりして書いてるけどさ、どうせみんなウィキペディアの丸写しだろう？ やったもん勝ちでさ、たいしたアイデアでもないのになあ？」

と、手厳しく批判した。浩樹は

「そうだね」

と苦笑いして同意しながら、そこまで言わなくてもと作家にちょっと同情した。

もちろん倉岳拍子の書いた「悪魔の未完小説」は彼の想像の創作だと思うが、現実とリンクして不安にさせる。上手いと言えば上手いが、卑怯な気がする。ジェイソンXYZがすっかりなりを潜めてしまったのもひょっとして………と怖い想像をしてしまう。他の参考にしたと思われる事件も犯人が逮捕されたという報道はない。

小説の中の殺人鬼が現実世界に出てきて作者を殺すなんて、そんな馬鹿げたこと、起こるはずない。

と、思うのだけれど……………。

「悪魔の未完小説」が発表されて1週間経つても「真・無形人間」の完結編を書く者は現れなかった。つまらない物は許されないというプレッシャーと、みんな、まさか………と思いながらもやっぱり、ひょっとして……………、と思つて怖いのだろう。

「真・無形人間」のアクセス数は相変わらず高く、「悪魔の未完小説」のアクセスもこの作者の作品としてはなかなか高かった。

浩樹はちよつと羨ましく思った。

13 ムカつくホラーオタクども

佐々木葉子は同じクラスの田中大介と佐藤浩樹が大嫌いだった。

休み時間になるといつも二人くっついて気持ち悪いホラー映画だのホラー小説だの話ばかりして、周りから気持ち悪がられているのが分らないのだろうか？ ああ気持ち悪いったらない。ホモよ、ホモ。現実の「ボーイズラブ」なんてこんなものよ。目を覚ませ腐女子どもっ！

………と、強くも言えないのよね。
何故なら、

わたしもボーイズラブ小説を書いているから。

わたしも「小説家になろう」で美麗な男の子たちのちょっとデープなラブアフェア小説を書いている。

ふんっ、いいのよ。イメージはジャニーズ系や韓流のイケメンたちなんだから。あんたらみたいなブツサイクなキモいホラーオタクなんかとは全然別世界の男たちなんだから。美しいのよっ！、わたしの男たちはっ！！

ペンネームは 花園スターレッド。

小4で「秘密の花園」を読んで文学に目覚め、

中2で「風と共に去りぬ」を見て大河ロマンに憧れ、

高1で先輩から借りた「スターレッド」で萩尾望都先生にはまり、
諸作を熱読。マンガは書けないので本格的に小説執筆を志す。

いつかは魂の震えるような感動的な本格大河ドラマを物にしてみたいものだが、今はまだまだ実力不足だ。

そこで今はちょっと……同人誌的な耽美趣味に走ってしまっている……。

学園を舞台にした濃ゆい、美麗男子たちの青春恋愛物語を執筆し、

東洋の王宮を舞台にした、姫を巡る「男たちの」恋愛物語を連載中だ。これはなかなか人気が高い。ふふん、ざまあみろ、わたしはあんたたちと違って超人気作家なのよ。

それなのに……。

長期連載の息抜きにちょっとしたホラーを書いて投稿した。

そうしたら、

なによっ！

ありがちなパターンの物まね小説？

血が美しいって「わたしの血はワインで出来ている」の親戚か？
って、なによそれ？ワケわかんない！

安っぽい小学生の少女マンガポエム？ 少女マンガを馬鹿にする
んじゃないわよ！ どうせ萩尾望都先生も山岸涼子先生も読んだこ
とないんでしょーが！？ この文化的未就学児どもが！ このパー
プリンどもが！ ブサイクどもが！ 生意気に人間の言葉なんてし
やべってんじゃないわよ、このブタ！ヤギ！ ブーブーメーメー耳
障りなんだよ！！、家畜ども！
家畜の分際で、

ストーリーも何もなく言葉に酔っているだけだ？

可哀相なイタイ子ちゃんだあ？

ふざっけんなっ、ブタっ！！、ヤギっ！！

ホラーって物が何も分かってない？ 分かるかよ、てめーらみた

いなキモい奴らのホラーなんて。分かりたくもねーよ。世間様をてめーらみてえな気持ち悪いホラーオタクといっしょにすんじゃねーや、バあ~~~~力。

わたしはね、あんたらと違って人気があるのよ！ 人気作家様なのよ！

床にひれ伏しなさい！ トイレに行つて来た足で頭を踏んづけてやるわよ、ありがたがりなさい！

この、下々の、…ええ~~~~~い……………、

クズ作家どもが……！！

……………クズをクズ以下に言う言葉が思い浮かばないのが腹立たしいわ。ふっ、わたしもまだまだ修行が足りないわね。とにかく、

「絶対許さないからね。」

14、「完結編」秘密実験バージョン

「真・無形人間」が開設されて3週間後、ついに新たな完結編が発表された。

満を持しただけあつて今度の完結編はちょっとすごい物だった。

「最終章その2」

前書き：

「無形人間」ファンの皆さん今晚は。無謀な挑戦者の桐筐羊羹と申します。

全力で知恵を絞って僕なりの「答え」を見つけたつもりです。これ以上に完璧な答えがあるなら是非見せてほしいものです。皆さん、特にオリジナル作者様の判定をお待ちします。

と本家に勝るとも劣らない自信満々の前口上で始まる完結編は、「最終章その8」まであるかなりの大作だった。

作者名は「きりはこようかん」だろうか？

浩樹が興奮しながら読み進めていったストーリーはだいたい次のようなものだった。

犯人は院長一家の部屋に引きこもっている女子大生の妹だった。彼女は心から信じ切っていた親友と恋人に裏切られすっかり人間不信になってしまっていた。

無気力に自分だけの世界に閉じこもっていた妹だったが、ある頃から不気味な地下通路を通じて病院内をさまよう夢を見るようになっていた。しかも足の汚れなどからどうも本当に部屋から出てさまよい歩いていたらしい。

妹は自分が夢遊病になってしまったと怯え、医師の兄に相談する。兄は外科医で専門外であったが、友人の精神科医と共に催眠術を施し、夢遊病の発作が起こったら洗面所で顔を洗ってベッドに帰るよう暗示をかける。

ところがその夜、入院患者の若い女性が無者かに殺害されてしまった。

防犯カメラでその姿を見た兄はそれが妹であると分かり驚愕する。妹の精神に何が起こったのか？ しかも弱い娘にあるまじき怪力とはどのように発揮されたのか？

夜中、夢遊病の発作を起こして部屋をさまよい出た妹の後を付け、兄は屋敷の中の隠し扉を抜け、謎の地下室へ下りていく。本当に存在した地下室に驚きつつ、そこが何の施設だったのか調べてまた驚く。そこは……

妹の病院への進入経路を知った兄は、病院への出入り口である霊安室やその他の監視カメラが無者かに操作されて妹の姿を隠していたことを知る。

それを行っていたのは父である院長だった。

そもそも病院をこの地に建てたのは院長である父と、母の父親である理事長の強引とも言える強い要望によってだった。

理事長は若き日、軍の研究員として前身である精神病院で患者を使った人体実験を行っていた。長い潜伏期間を経て、社会的実力を付けた理事長が若き日の研究を再開させていたのだ。現在は院長が跡を継いで実際の実験を行っていた。

現在再開された軍の秘密実験とはどのような物なのか？

行われていた実験、それは人と人との精神の連結だった。

大戦中、敵に勝つため国民の強固な意思の統一が必要とされ、様々な分野でその研究が行われた。

精神病院で行われたのはその医学的アプローチの一つだった。

驚くべきことに実験は半ば成功していた。

複数の脳を電氣的に連結し、強力なテレパシーを発生させることに成功したのだ。

しかしそのテレパシーの内容を操ることは出来ず、周囲に悪夢として撒き散らかされるだけだった。

しかしそれはそれで敵国で大規模に行えば精神兵器として利用できる。軍はさらなる研究、実験を推進した。

強力なテレパシーには副作用があった。

受信者を一人に絞ると、その者は強力な超能力を発揮するようになった。

その能力の発現は対象者の秘めたる素質によって様々だった。

しかし超能力を発揮する受信者も自由意識を持てず、でたらめに暴力的に能力を振るうのみだった。

軍はこれも人間兵器として使えると、さらなる研究を押し進めた。軍は人体実験の患者たちを「装置」として固定することに成功した……………。

しかし実験のさなか、患者たちが暴動を起こし、病院は破壊され、多くの医師看護師たちは殺害され、火事が起き、病院は消失した……シエルターも兼ねた秘密の地下実験施設を除いて……………。

理事長はテレパシー発生装置の完成にこだわった。
今になって何をするつもりか？

人の精神を外部から強力に操ることが出来れば、世の中のあらゆることを自分の思いのままに操作することが出来る。

いささか痴ほうの差してきた理事長はマッドサイエンティストと化し、まだ若い院長はその成果に野望を抱いていた。

60年以上前の「装置」が今も生きていた。

テレパシー発生装置として人体実験された患者たちは、薬品の投与によってゆっくりと固まって樹脂化していき、プラスチックのミイラとなって、30体余りが、「装置」として整然と並び、連結されていた。

院長は実験体として精神のシンクロ率が高いと思われる母親を発信者に、娘を受信者にして実験を行っていた。娘の夢遊病はその実験によって引き起こされた現象だったのだ。

単純な行為から次第に高度な行為へ段階的に引き上げていく予定だったが、アクシデントが発生した。

兄が施した催眠術によって夢遊病中の妹が鏡で自分の姿を見て、母親や「装置」の記憶と混線し、すっかり自分という意識が分解してしまった。

妹は「自分」を捜して病院をさまよい、病室に「自分」（「若い女性の入院患者」）を見つけるが、「自分」になることを拒否され、怒りにまかせて超能力。妹の場合は強力なサイコキネシス。物体を動かす物理的エネルギーの発生、を発動し、「自分」を拒否した女性を破壊してしまう。

「別の自分」を壊したことで落ち着きを取り戻した妹の精神は、休息をとるため自分の部屋に帰り、眠りにつくと、目覚めたときにはすっかり元の精神に戻って夢遊病中の記憶はなくしていた。

院長は警察の捜査が入ったこともあり実験を中止していたが、いったん強力に結びついてしまった娘と装置と母親の精神は、就寝中

に同じ悪夢で結ばれ、娘は再び「精神分解」の発作を起こし、自分を治療するために新しい女性入院患者を破壊してしまう。

兄の外科医師にも父親の行っている実験のことが知られてしまい、兄は苦悩しながらも妹と家族、自分のキャリアを守るため、実験の事実を秘密にし、妹の犯行をかくまうことに同意する。

母親と妹は父と兄がそれぞれ監視し、テレパシーのシンクロを防ぐ努力をしていたが、兄は妹を救うため根本的な方法を探る。

しかしその努力の最中、一人の刑事に地下実験室のことを嗅ぎつけられ、侵入されしまう。

父は自らテレパシーの発信者となり、刑事に強力なテレパシーを送りつけ、脳を破壊しようとする。

刑事は苦しみながら武道で身につけた精神統一でテレパシー攻撃をしのぎ、逆に父は空回りした装置からのフィードバックでテレパシーに精神を蹂躪され、廃人になってしまう。

しかし院長もテレパシー発生装置と化し、病院中に凶暴な悪夢が蔓延する。

患者や医師たちが野獣と化して殴り合い、殺し合う。

刑事は「装置」を破壊するが、既に強力なテレパシーのネットワークが出来上がってしまっていて、被害者たちの暴動は収まらない。責任を感じた兄は、妹と直接精神を連結させ、テレパシーの輪の中に割り込み、妹の精神を見つけ、妹への愛情を訴える。ようやく悪夢の中で「自分」を見つけた妹の精神は安定するが、そこへ暴力的なテレパシーのエネルギーが一気に押し寄せ、妹と兄は共に脳を破壊されて死んでしまうが、最期には目を開けお互いを認めた二人の表情は穏やかな物だった。

<
完
>

15 批評

……と、

というのが桐筐羊羹によるいわば「秘密実験バージョン完結編」の
あらずじで…、

あらずじを説明するだけでもたいへんな代物だった。

面白い。

と、浩樹は思った。読んでいてかなり興奮したし、謎も一通り説明されている。

なかなか見事な解決編だ。

が、

なんだか面白すぎて、もう一つ別の小説を読まれた気分だ。

これはこれで面白いけれど、それまで具体的なフリのない「驚くべき事実」がバンバン出てきて、「そうである必然性」には薄い気がする。

それまでリアルな警察系ホラーだった物が、「テレパシー発生装置」に「サイコキネシス」と、SFマンガの小道具が出てきて、ちよつとそれまでの面白さとは異質に感じる。

面白いけれど……

75点

というのがあくまで「無形人間・完結編」としての浩樹の採点だ。
まあ浩樹的には一応合格点だと思うが。

他のファンはどう見るのだろう？

翌日、さつそく大介に感想を聞いてみた。

「面白いんじゃないか？」

辛口の大介にしては珍しく素直な褒め言葉だ。

「まさに意外な結論だったよな？ ミステリーじゃなくてホラーだもんな、ちよつとぶつ飛んでるくらいが面白いよな？ 決着の付け方もきれいで、あれなら一般のホラーファンにもウケがいいんじゃないか？」

とまあ、浩樹が驚くくらいのべた褒めだ。

呆れたような浩樹の顔に大介が意外そうに訊いてきた。

「浩樹君はどうなんだ？ 面白くなかったか？」

「面白かったよ」

「そつだろう？」

「でもさ」

「でも？」

「あんまり「無形人間」としての必然性は感じなかったな」

と、浩樹は昨夜読んで感じたことを素直に言った。

大介は、ちよつとムツとしたような顔になった。

「でもさ、俺だつてあれ以上の完結編なんて思いつかないぜ？」

「そうなんだけどさ。バリエーションの一つとしてありだと思っけど、絶対、っていう決定力はないように思っただよ？」

「なんだか向きになつてゐる大介になんだか言い訳するみたいになつてしまつた。」

「そうかなあ？……」

と、大介は不満そうに口の中でぶつぶつ言った。よつぱどお気に入りのようだ。

浩樹はちよつと話題の方向を変えた。

「作者は誰だろうねえ？ けつこつ書き慣れている人だよねえ？」

「そうだな。誰だろうな？ 俺は案外桐山容堂本人が変名で書いたんじゃないかと睨んでるんだけど？」

まだそんなことを言うのか？と浩樹は内心ちよつと呆れた。

「それはないと思うけれど……。僕は案外、倉岳拍子辺りなんかどうかと思うんだけど？」

「倉岳拍子いゝゝゝ？」

大介は不満そうに思いつきり顔をしかめた。

「違うかな？」

「違う違う。あの作者にあんな完結編は書けやしないよ」

「そうかな？　だって前に「霊能力者姫宮魅智シリーズ」でテレパシーで人を殺す不死身の新人類が出てきたじゃないか？」

「あんなのは「スキヤナーズ」と「バイオハザード」のパクリだ」

「そう？　それを言うならあの完結編だって「キャリア」じゃないか？」

「サイコキネシスってだけだろう？　「キャリア」はもう古典だからいいんだよ」

なんだかむちゃくちゃな論理になっている。らしくないなあと思う。

「そうだね。倉岳拍子ではないか。倉岳拍子って安っぽいホラー的表现ってしないもんね？」

「安っぽいホラー的表现？」

「うん。ほら、「異形」とか「漆黒の闇」とか「猟奇的」とか「非日常」とか、ホラー独特の決め言葉みたいなものって使わないじゃない？　「怪物」とか「真つ黒」とかいう普通の言葉で済ませちゃってさ。きのうの「完結編」はそういうホラー言葉のオンパレードだったもんね？　あれは倉岳拍子の文章ではないね」

「倉岳拍子なんて、八方美人の、一般文学を気取った、いけ好かねえスカシ野郎じゃねえか」

すっかり怒らせてしまった。もはや個人的悪口だ。確かにやたら早書きらしい倉岳拍子の文章は、ストーリーを追う気持ちが先走りすぎて、ポキポキして、ホラーファンが大好きなねっとりしたホラー独特のセクシーさが無い。それに、確かに倉岳拍子があんな自信満々の前口上なんてするとは思えない。

すっかり怒ってむくれている大介に、

「あのさあ……」

と浩樹は恐る恐る訊いた。

「もしかして、あの完結編書いたのって、………大介君なんじゃないか？」

大介はギョツとした顔で固まった。

「………お、俺のわけねえじゃん。俺、あんなすげえの書けねえよ……」
と、ぎゅっと口をつぐんでしまった。

「そう」

と、浩樹は一応納得した顔をして、大介のご機嫌を取るように言った。

「面白かったよね。あれ以上の物は、やっぱり出ないだろうね？」
「そう………思うぜ？」

と、大介は照れたように、ようやく機嫌を直してくれた。

16 イベント終了？

「秘密実験バージョン完結編」はなかなか好評なようだった。他でもない噂の？倉岳拍子が絶賛の感想を送っていた。

▼良い点

難しい謎に見事な解答を与えている。

▼悪い点

オリジナルには書かれていない登場人物のキャラクター性が創作されている。ギリギリのところだと思いがやりすぎるとなんでもありになってしまう一歩手前。

▼一言

どなた様か存じませんが見事な完結編でした。

与えられたヒントと条件の中でどれだけ面白い物語を完成させられるかの勝負でしたが、更に大きく設定を膨らませた快作と言つていいと思います。

SF方向に走りすぎた嫌いはありますが、多少整合性を壊しても突出した部分がある方がホラー的で気持ちいいです。かなり「ホラー」を分かつていらっしゃる愛好家の方とお見受けします。わたしも存分にホラー的趣味を満足させていただきました。

わたしも元々オリジナルの「無形人間」には注目していて完結を楽しみにしていましたが、ようやく完結しましたね。

100点満点です。

ありがとうございました。

「相変わらず偉そうにくだい文章だよなあ？」

と言いつつ、翌日学校で大介はこれ以上なく上機嫌だった。

そう、この倉岳拍子という人は気に入った作品があると割とこまめに（自分の作品同様）長い感想を書いて送っている。

実は浩樹「リユウ・ライター」も短編に褒めちぎりの感想を一度もらったことがあり、やっぱり相当嬉しかった。まあ1作切りで、「お気に入りユーザ」にも登録してもらっていないが。浩樹は「お気に入りユーザ登録」してやったのに、やたらと褒めるくせに、けっこうシビアだ。だいたいこの人は女の作者に甘い。感想を送るのもお気に入りユーザに登録しているのも8割以上女だ。いい年したおじさんのはずだが、職場に全然若い女がいないのだろう、いまだに女に対して幻想を抱いて、絶対独身だ。

今回は珍しく男（？）の作者の作品を褒めちぎっているが。

なんか腹が立つので浩樹はもう一度大介に訊いた。

「ねえ。あの完結編書いたの、やっぱり大介君なんじゃない？」

「ええ〜？ 違うつて言ってるじゃんかよ〜」

と言いつつ、その顔にはあからさまに

『そつだよ〜ん、俺様が作者様なんだよ〜ん』

と書いてあるようで、まったく、しゃくだ。

これまでの完結編には「くだらない」とか「つまらない」とか「面白くない」とか「ゴミ」とか、

「一言悪口」みたいな感想ばかりが多く目立ったが、今回は肯定派も否定派もちゃんと「自分の意見」を述べた感想が多い。感想受付の設定も（ユーザからのみ）に設定されたままで（↑浩樹は過去の犯罪を思い出して胃が痛くなる）、感想はちゃんとユーザ名を名乗って書かれている。

シリアスなホラーファンが集っている感じで微笑ましいが、ただ、寄せられる感想の数はこれまでと比べるとずいぶん少ない。そして、アクセス数は日を追って半減していった。

それかもしれない。だいたい「小説家になろう」の作品はいったん完結してしまうと、その時はアクセスが跳ね上がるが、それもせいぜい3日程度の間で、その後ははつきり激減していき、人気ランキング上位のごく少数の定番人気作を除いては、1日のアクセスが1、2、……0、なんてのが当たり前になってしまう。まあ次から次に新しい作品が発表されてデータがリストの後方に下がっていくのだから仕方ないが。そうしてすっかり日の目を見なくなってしまう過去の傑作名作も多くあるはずで、もったいないことだ。

「秘密実験バージョン」で「無形人間」は完結したと見なされ、もはや新しい更新はなく、「真・無形人間」はどんどん古い作品になっていき、また誰も顧みない過去作になってしまうのだ。

寂しいが、

どうやら「無形人間」のイベントはこれで終了のようだ。

浩樹には結局桐山容堂本人からのコメントが何もないのが物足りないし、やっぱり尻切れトンボのままで、残念だ。

ところで、

「秘密実験バージョン」を書いた作者の元に、物語から抜け出した殺人鬼は現れなかったのだろうか？

17 恨み重なる

花園スターレッドの活動報告

・炎の粛清を！ 06/0x 19:25

親愛なる読者の皆様、今晚は。花園スターレッドです。

今日は皆様には是非お願いしたいことがあります。

わたくしは去年の冬に「ブラッディー・ローズ」というホラー小説を発表しました。その節はたくさんの皆様にお読みいただき、温かい感想を賜りましてまことにありがとうございました。たくさんの方にお楽しみいただけましたようで、ホラー初挑戦だったわたくしはとても嬉しく、励まされたものでございます。

ところが、中にひどく意地悪な、嫌な感想を送ってきた人がいます。

忘れもいたしません、

「あなたはホラーというものがまるで分かってない。少しは他の「まともな」ホラーを読んでもう少し勉強してから書きなさい」

と、なんとも高飛車に、未熟者を指導するありがた迷惑なもので、わたくしの繊細な心はグサリとナイフを突き刺されたみたいに傷つけられました。

わたくしにそのような無礼な感想を送りつけたのは、「ディープレッド」(<http://mypage.sosetu.com/xxxxx/>)を名乗る作者です。

実はわたくしはこの男が陰で更にひどい悪口を言っていたのを知

っています。

わたくしは悔しくて、腹立たしくて、夜枕を涙で濡らしてしまう
ほです。

わたくしはこの男が憎くて仕方ありません。

ところで皆さんは、まあご存じないとは思いますが、「真・無形
人間」なるホラー小説をご存じでしょうか？ ご存じありませんわ
よね？こんな不気味な嫌なホラー小説なんか。

でも今ちよつとしたイベントが発生して、ごく一部のホラーマニ
アの間だけですけれど、ちよつとした盛り上がりになっているので
す。作者が「完結編を書いてくれ」なんて連載中途の作品を丸投げ
しちゃって、なんて無責任でしょう！ 読者を全然大切にしていな
いのですね。わたくしは読者の皆様を心から愛していますわよ？

その誘いに乗って「完結編」を書いたホラーマニアがいて、キ
リバコようかん なんてふざけた名前を名乗っているんですけれど、
実はこのキリバコようかんが、あのにつっき、

「デープ・レッド」([http://mypage.syo-
seitaku.com/xxxxxx/](http://mypage.syo-seitaku.com/xxxxxx/))

なんです。

わたくしも嫌々その完結編を読みましたけれど、まあ、醜くて、
荒唐無稽で、本人同様ブサイクで、まったくひどい代物でした。こ
んな代物を「快作！」なんて褒める人の気が知れません。きつと「
デープ・レッド」同様ろくでもないマニアなのですわ。ああ嫌だ。
哀れな可哀相な人たちですわ。

わたくしの親愛なる読者様たちへのお願いとは、他でもありませ
ん、この不埒な、思い上がっている「デープ・レッド」([http-](http://)

p:/mypage.syosetu.com/xxxxxx/
に、いかにこの人の書いている物がつまらない代物か、教えてあげて欲しいのです。

この人の書いたいくつかのくだらないホラー作品と、「真・無形人間」の感想を、皆様の素直な感性で感じるままに、作品への感想や作者へのメッセージを送ってあげて欲しいのです。

彼に自分の身の程を分からせてあげてください。

わたくしもこれから彼の全作品に正直で丁寧な感想を送ってやろうと思います。

皆様も寂しい彼に是非感想メッセージを送ってあげてくださいね？

かしこ。

18 夜歩く

大介の様子がおかしくなってきた。

顔色が悪く、目の下に黒いクマを浮かべて、いつも眠そうにして、そのくせハツと驚いたように顔を跳ね上がらせて自分が今どこにいるか確認するように辺りをきよるきよる見回して、ほっとしたような顔をしたかと思えば、また暗い顔になってうつむいて、何か深刻そうに考え込んでいる。

昼休み、弁当を食べ終わって大抵のクラスメートが教室を出ていくと、浩樹は心配になって声を掛けた。

「どうしたの？大介君。このところちょっと変じゃないか？」

「ああ、いや、別に……」

口ごもるように否定しながら、実は誰かに話したくてしようがないように浩樹の顔を覗き見た。浩樹が見つめ返すと、

「あつ、いや……」

と視線を逸らしながら、やっぱり話したいように見つめ返してくる。

「どうしたの？ 何か心配事？ 僕なんかが役に立つかどうか分からないけれど、友だちなんだからさ、話してみろよ？」

「友だち……だよな？」

皮肉屋の大介が、相当参っているようで、じーん……と目を潤ませた。可哀相だけど、……ちょっと気持ち悪い。

「実はさ……、

夢を見るんだ……」

「悪い夢？」

「いや……、なんつか、普通の夢なんだけどさ……」。

夜、家を抜け出して外をうろつく夢なんだ……」

「ふうーん。まあ……、僕もそういう夢なら見るよ？ 僕なんて裸

で昼の街中に立っている夢を見たよ？」

「そりゃ性的欲求の表れだ」

大介はちよつとだけいやらしく笑って、また深刻な顔に戻った。

「俺はさ、ただ外を歩き回るだけなんだけど、家の近所から始まって、最初の内はシャッターの閉まった商店街とか、公園とか歩き回っていたんだけどさ」

大介の家はこの学校のすぐ近くで、だから大抵浩樹より先に登校している。

「それが…、日を追うことにどんどん遠くまで歩いていくようになって、行ったことのない遠くまで歩いて行くんだけど、それがすぐリアルなんだよな。全然行ったことのない所なのに、細部まではつきりしてるんだ。あんまりはつきり見た覚えがあるんで、昼間自転車で夜中夢の中で歩いた道を辿っていつてみたんだよ。そうしたら、夢の通りに道が続いていて、周りの景色も夢の通りなんだよ。まあ昼間だから感じは違ってたけど……」

「気のせいだろう？ 忘れてるだけで前に来たことがあったんだよ」

「いや、違う！ 確かにそれまで行ったことなんてない場所なんだ！……」

大介はやけに向きになって主張し、ひどく怯えた顔をした。

「それに……、」

朝起きるとひどく疲れているんだ……、まるで……、

夜中中歩き回っていたみたいに……」

「大介君、日ごろ運動不足だから、ちよつと運動したり…、自転車に乗って遠くまで行ったりして疲れが出たんじゃないの？」

「足がさ……」

「足が……汚れていたりとか？……」

「いや、汚れているわけじゃないんだが……、臭いんだよ、裸足で靴を履いて長時間歩き回っていたみたいにな……。こう見えても俺わりと清潔な方だから、風呂入った後でさ、朝出かけるまでにそんなべたべた汗臭いようなことはないんだ……。やっぱりさ……」

……」

大介は恐ろしそうに涙目で浩樹を見つめた。

「本当に歩き回っているとは思えないじゃないか？……」

「……まさかあ……」

浩樹も大介の深刻な顔にゴクリとつばを飲み込んで、わざと明るく装って言った。

「本当かあ？　僕をからかっているんじゃないのかあ？」

「なんだよ、やっぱ信じないのかよ？」

「ああ、ごめん！　悪い、信じる！……でも……、それって

……、大介君が夢遊病になっちゃったってこと……？」

「そう……　としか思えない。実はさ、証拠があるんだ。……見たい？」

「うん……」

大介はカバンから小型のビデオカメラを取り出した。

「俺も実は半信半疑で怖かったんだけどさ、やっぱ確かめなくちゃならないと思ってさ、寝るときこれで撮影したんだ。暗くて長時間撮影だから映り良くないけど」

大介は液晶ファインダーにビデオを再生した。あらかじめその辺りで止めていたようで画面の端の時刻はAM00:13だ。オレンジ色の常夜灯の下、ベッドに大介が寝ている。大人しく上を向いていた大介が、突然起き上がったが、その起き上がり方が変だった。まるで背中に棒でも入っているように上半身まっすぐのまま、バネ仕掛けのように起き上がって、布団をめくって床に下り、裸足のままカメラの前を横切り、たぶん廊下へ、出ていった。暗くてよく分からないがカメラに向かってきて、画面から切れていった大介の顔は、表情といったものがなく、まるで操られたロボットみたいな印象だった。

「トイレに起きたんじゃないの？」

大介は首を振り、しばらくなんの変化もないビデオを見ていたが、止めた。これ以上見ても何も起きないということだろう。

「撮影は5時までやっていたけど、それまでに俺は帰ってこなかった。で、その間俺はすげえ遠くまで遠足していた夢を見ていたわけだ。朝ベッドの中で目を覚まして、俺はすげえ疲れていて、足がすげえ汗臭くなっていたわけだ。なあ、浩樹君、俺が怖いのはさあ……」

大介は皮肉な笑いを浮かべようとして、今にも泣き出しそうに顔を歪めた。

「俺がこの先夢の中で何をするか？、なんだ。歩き回って……、今まで誰かに会ったことはないけど、もし、誰かに会って、話し掛けられるようなことがあったら……、俺……、その人を、どうするんだろうなあ？」

「さ、さあ？……」

浩樹はともその疑問に答えることは出来なかった。

19 ネット闘争

浩樹は引き続き大介と話した。

大介はすっかり怯えてしよげてしまっている。

浩樹は元気づけるのと、問題解決の更なる情報を得るため尋ねた。「ところでさ、「ディープ・レッド」の作品が急に人気が出たみたいじゃない？」

「DEEP RED」はイタリアのホラー帝王ダリオ・アルジエント監督の「サスペリアPART2」のアメリカタイトルだ。ちなみにイタリアの原題は「PROFONDO ROSSO」で、内容は「サスペリアPART2」でもなんでもない。「PART1」のヒットを受けて急遽日本公開された、「PART1」の前の作品で、いい加減な扱いだが、こっちの方がはるかに怖い。リアルな連続殺人物で、あまりの怖さに浩樹など何度も途中でギブアップしそうになった。

そんな「DEEP RED」をペンネームに使っているところからもこの作者のホラーマニアぶりが窺える。

「ディープ・レッド」は「小説家になろう」上に5本の短編と2本の長編を掲載し、現在不定期で「クトゥルフ神話物」を連載中だ。いかにもマニアだ。

いずれの作品もかなりディープでハードな本格ホラーばかりで、まあそこそこのアクセスがあった。浩樹よりはずっとアクセスが多く、ちよつと嫉妬を感じたりしていた。

そこそこの人気のマニア御用達ホラー作家とその作品群だったが、この2週間ほど……はつきり言えば「真・無形人間・完結編」が発表されて以降、急にアクセスが増え始め、作品に感想も寄せられるようになった……のだが……。

「でもさ、なんなんだろうな、あの「花園スターレッド」って作者？」

「さあ、なんだろうな？」

大介は疲れてうんざりしたような顔で言った。

「花園スターレッド」は、浩輝たちとは縁のない、「ボーイズラブ」の恋愛ジャンルの作品を発表している作家で、まあけっこう好き者のファンが多いようだ。一作だけホラーの短編を発表しているが、それに「ディープ・レッド」が否定的な感想を書いたからだろうか、この数日で立て続けに「ディープ・レッド」の全ての作品にひどい悪口の感想を送りつけている。同じ「レッド」同士で相当馬が合わなかったのだろうか？ 浩樹は関わりたくないと思って傍観を決め込んでいるが。

「でもなんで今頃急にあんなことやりだしたんだろうね？」

「知らねえよ」

「思うんだけどさ、「無形人間」の2番目の「完結編」を書いたのが、「花園スターレッド」だったんじゃないかな？」

2番目の完結編は「星輪クラリス」の書いた「サイコ版」だ。気取った文章や変にメルヘンにトリップしちゃつてるところとか「醜と美」みたいな耽美的？なところが共通している。名前も「スター」つながりだ。

「ええ？」

大介はちよつと驚いたような顔をして、すぐに興味をなくしたように疲れた顔に戻った。

「違うよ。あんな腐れ恋愛ブスに腐ってもまともなホラーなんか書けねえよ」

「そう？」

浩樹は大介の言いぐさにちよつと驚いた。

「「ディープ・レッド」もあの完結編にはけっこうひどいことを書いていたじゃないか？」

「あのさ」

大介は迷惑そうな顔で浩樹を睨んだ。

「そんなこと、「ディープ・レッド」に訊いてくれよ」

「訊いてるつもりなんだけどなあ、「ディープ・レッド」に」

大介はむくれたような顔になった。

「じゃあさ、どうせもう知ってるだろうからこっちから先に明かすよ」

浩樹は、もういいや、という気持ちで言った。

「「リュウ・ライター」が僕だよ。大介君が「ディープ・レッド」なんだろう？」

大介は仕方ないように苦笑した。

「「リュウ・ライター」ってなんだよ？ 浩樹君はゴリさんのファンか？」

「いや、「ドラゴンの書記」ってつもりだったんだけど……。変だったね？」

「相当変だよ。ギャグだ。センス疑うなあー」

大介はおかしそうに笑って、浩樹も笑った。

「で？、そっちは？」

「ああ、分かったよ。そうだよ、俺が「ディープ・レッド」だよ」

「「真・無形人間」の完結編を書いたのも？」

「そ。俺だ。どうだい？ なかなかいい完結編だったろう？」

「うん。感心した。面白かったよ」

「へへへへ……」

大介は照れ笑いを浮かべて、またずっと暗く落ち込んだ顔になった。

その大得意の完結編が、今作者を恐ろしい状況に追い込んでいる

……。のだろう。

浩樹は訊いた。

「夢遊病は……、本当なんだね？」

「ああ」

大介は深刻な顔でうなずき、ぶるつと震え上がった。

「やっぱり「完結編」を書いたせいなんだろうね？」

「そうだろうな」

「でもさ、「真犯人」に殺されたわけじゃないじゃないか？」

大介は嫌な顔をした。浩樹はかまわず言った。

「はつきりした事実としては、大介君が夢遊病になってしまった、ってだけじゃないか？ まさかさ、本当に小説で書いたようにテレパシーに操られてエスパーのモンスターになって人を殺してしまう、なんて信じているんじゃないだろうね？」

「いや……、まあ……」

大介は何とも煮え切らない顔をして目をそらした。半分くらい信じてしまっている顔だ。

「大介君、自分で言ってたじゃないか？、どうせちまたの事件と完結編のイベントを絡ませただけの思いつきの安易なアイデアだって？」

倉岳拍子の「悪魔の未完小説」のことだ。あれを今、大介は半ば真に受けて悩んでしまっているのだ。

「だいたいあの小説じゃ殺人鬼が小説の中から現実の世界に現れて作者を殺しちゃうんだよ？ 大介君は自分が殺人鬼になっちゃってるじゃないか？」

「う、うん……。まだ人を殺してないけどな……」

「ものすごく真剣に書いたんだろう？ だから精神がまだ小説から抜け切れていないんだよ。夢遊病って精神的なストレスから発症するものなんじゃないの？ だからさ、自分は今病気なんだって認めちゃえばいいんだよ。ちゃんと分かって、リラックスすれば、自然と治るんじゃないかな？」

「そ、そうかな？」

「そつだよ。きつと。それともさあ、」

浩樹はいつも自分がされているのでここぞとちよつと意地悪に笑って言ってやった。

「やっぱり運動不足なんじゃない？ ジョギングでもしてしっかり疲れて、ゆっくり風呂に浸かってベッドに入れば、朝まで外をほつつき歩いたりしないでぐっすり眠れるよ」

「俺、運動嫌いなんだよなあ……」

大介は別の意味で嫌な顔をしたが、諦めて、吹っ切れたようにさっぱりした顔になった。

「そうだよな。小説の通りに殺人モンスターになるなんて、馬鹿げてるよな？ あーあ、ジョギングかあゝ、どうせなら金髪的美ジヨガーでも追いかけて回したいぜ」

「おいおい、そんなこと考えてると、夢遊病中に別の犯罪者になっちゃうぞ？」

「ああー、それも困るよな。一生ヘンタイのレッテルがついて回るぜ」

「そうそう、真面目に汗をかきたまえ。たまには普通の青春らしくていいだろう？」

「似合わねえよ、俺」

「確かに。」

「うるせーよ」

浩樹が笑ってやると、大介も笑った。すっかりほっとしたようで、これならもう大丈夫だろうと浩樹も安心した。

ふと、後ろの隅の席で一人文庫本を読んでいる女子が気になった。夢遊病だの殺人だの、およそまともでないことを深刻に話し合って、さぞかし変に思われただろうが……、それより、

その女子の顔が、なにかひどく不愉快そうだったのだ。

いつつ一番最後までもそもそ弁当を食べている奴で、その後もいつつもああして一人教室に残って本を読んでいる。たいてい文庫本を、わざわざ別売りのブックカバーを掛けて、それを知っている自分も人のことをとやかく言えないが。

あいつもいかにも小説やポエムなんか書いていそうだよなあ、と思った。

その彼女が文庫本から目を上げてじろつと浩樹を睨んだ。浩樹は慌てて視線を逸らした。

不機嫌な顔をしているのは本の内容がよほど不機嫌になるものな

のか、それともべたべたに甘ったるい恋愛物を浩輝たちの気味の悪い会話が邪魔したせいかな。分からないけれど、

クラス的女子たちからも浮いて、気持ち悪い奴だよな、

と、浩樹は思った。

20 危機！

花園スターレッドの活動報告

・なんで！？ 06/0× 19:37

皆さん、なんですか？ なんてどなたも「ディープ・レッド」を攻撃してくださらないの！？

わたくしはこの男にこんなにも辱められて、こんなにも恨みに思っていますのに！ どうしてどなたもわたくしの援護をしてくださいませんかの！？

それどころか、

どうしてわたくしの作品を読んでくれなくなりましたの！？ 「後宮の麗人たち」第138話「レイシの告白」アップいたしましたのよ！？ レイシがコンスウに秘めたる思いを伝えるクライマックスですわよ！！！！ 皆さん心待ちになさっていたでしょう？ なんですの？？？？？？？？？？？

桜紅 さん、南四条 さん、くるみ嬢 さん、ホワイトアスパラ さん、Yucco さん、大和なすび さん、綺羅綺羅 さん、オハナ さん、彩美 さん、ケチャ猫 さん。

どうして！？ どうして！？ どうして！？ どうして！？

どうして！？ わたくしを「お気に入りユーザ」から外してしまわれたのですか！？ どうしてですか！？ わたくしは皆様をちゃんとお気に入りしていますよ！？ わたくしがお気に入りを外してもいいんですか！？

ねえ、どうしてですか？ わたくしは皆様を、皆様だけを、こんなに愛しているのに、皆様はわたくしを愛してくれていないので

すか？

わたくしは寛容な人間のつもりです。まだ間に合いますわよ？

どうか考え直して、につき「ディープ・レッド」のブタを潰してください！

お願いです、

皆様、仲直りいたしましょう？ 前のように楽しくおしゃべりいたしましょう？

わたくしを、

独りにしないでくださいませ。

お願いいたします。

お願いいたします。

・・・・・・・・・・・・・・・・

風呂に入っている間に携帯に大介から電話が入っていた。
なんだろうな？と浩樹は大介にリダイヤルした。

「浩樹君……………」

「大介君。今晚は。なに？ 電話なんか珍しいね？」

「俺…………、駄目かも知れない……………」

「駄目って、何が？」

「「真・無形人間」の完結編を…………消された……………」

「ええっ！？」

浩樹は驚いた。

「ちよつと待って、今してみる」

浩樹は机に向かって、スリープしていたディスプレイを起こし、

開いていた自分のユーザページから「真・無形人間」にアクセスした。

「あつ。……………本当だ、消されている……。いつたい誰が？」

『「感想」をってみろよ』

「感想」を開いて、浩樹はまた驚いた。投稿者の名前が黒字になつて……つまりログイン無しの匿名で、「天使」なる名前で感想が書き込まれていた。

▼良い点

無し。ナッシング。

▼悪い点

全部。オール！

▼一言

死ぬ。くつだらねえ。おまえなんか存在そのものが犯罪だ。人様に迷惑掛けてはいけません。法的犯罪者になる前に死んでください。

「……………なんだよ、これ……………」

あまりにひどい言いように浩樹は胸がムカムカした。

『浩樹君……………』

「大介君。こんなの無視しろよ。テキストはあるんだろう？ もう一度投稿し直せよ？ 真面目なホラーファンはちゃんと支持していいじゃないか？ 味方の方がずっと多いんだ、こんなくだらない嫌がらせなんか負けるなよな？」

『俺……もう駄目だ……………』

「駄目じゃないって！ 負けるなよ、しっかりしろよ！」

『俺さ、今、眠くてしょうがねえんだ。浩樹君に言われたようにちよっとジョギングしてみたんだ。そしたらすぐへばって、シャワー浴びて飯食ったら、もう……、眠くて眠くて……。なんかさ、変な眠気なんだ。意識を失っちまいそんな強烈な奴がぐわって襲って来るんだ……』

「だっ、大介君!？」

『う、うん……。まだ大丈夫……。でも……いつまでも保ちそうにない……。眠っちゃったらさ……。あいつが出てきそうな気がするんだ……』

「あいつって、誰？」

『テレパシーのモンスターだよ』

「そんなわけないって！ 妄想だよ！ ね、ねえ、そんなに心配なら、俺、そっち行こうか？」

『……今、雨降ってるぜ……』

「え……。あ、ほんとだ……」

『いいよ……。浩樹君を巻き込みたくない……』

「なに深刻に落ち込んでるんだよお？ しっかりしろよ？」

『浩樹君……。俺の唯一のリアルフレンドだもんな。その浩樹君を……。殺したくないよ……』

浩樹は「友だち」と呼ばれて感動した。

「だからあ、冷静になって考えてみるよ？ そんなこと、起きるわけないだろう？」

『もういいよ。これまで、ありがとうな。楽しかったよ』

「まっ、待てっ！ 待てよお。えーと、うーんと、そうだなあ……」

……

浩樹は必死に考えた。大介は本当に自分の書いた「無形人間」の世界に「精神」を取り込まれているのだ。小説の中からテレパシーが発せられて作者を操ったり、本物の殺人エスパーモンスターが現れるなんて起こりっこないが、夢遊病になった大介が何か恐ろしい事件を引き起こしてしまう恐れは十分ある。

何か、大介を納得させる方法はないか……………

『「真犯人」はさあ……………』

「……………えっ？ な、なに？」

『「真犯人」はさあ、フランケンシュタインのモンスターと同じなんだ。奴は創造主フランケンシュタイン博士にこの世に生み出されながら、名前も与えられず、自分が何物なのか分からず、相容れない世の中を憎んで、創造主である博士を恨んで、殺人を犯して行くんだ……………。寂しい、愛を求める哀れな奴なんだよ……………』

「えーと……………、どういうことかな？」

『奴はちゃんとした「自分」になりたいんだ。でもそれを否定されたから……………』

「それじゃあつまり、「真犯人」はただ作者を殺したわけじゃなく、せつかく得た自分の「正体」を「削除」されて、それで恨んで作者を殺したって言うのか？」

『うん……………。今、そんな気がしてる……………』

「いや、違うよ。ジェイソンXYZの完結編はそのまま残ってるじゃないか？　なのにあいつは真つ二つにされて殺されちゃったよ？」

それが事実かどうか分からないが、今は大介の精神に合わせて考えてやらなくてはならない。

『ジェイソンXYZは……………、全然まともな正体なんか書いてないじゃないか？　でたらめだよ。だから最初から自分の「正体」なんて認めなかったのさ』

「そ、そうなのかな？」

なんだかこじつけの屁理屈に思えるが、大介がそう考えているんじゃない。大介が実に残念そうに言った。

『俺のは……………、かなりいい線行っていたと思うんだけどなあ……………。ひよっとしたらこのまま、俺がモンスターになることはあっても、「真犯人」に殺されることはなかったんじゃないかなあ？……………』

大介が自分に何か期待しているように思えた。

「……………分かった。じゃあ、僕が大介君の書いた完結編を修復してみ

るよ。多分まだGoogleの取得したページがそのまま残っていると
思うから」

『多分、それじゃもう駄目だ。いったん否定された「正体」はもう
受け付けない』

「そんなあ。じゃあ、どうすればいい？」

『もし、もし、浩樹君が本気で俺を助けてくれるつもりなら……、
浩樹君が新しい「正体」を「真犯人」に与えてやってくれないか？』
「ええっ！？ そんなの……、僕には無理だ。いや、無理だったん
だよ？」

『じゃあ……、多分これでお別れだ。さようなら』

「待て待て！ はやまるな！ 分かった、書くよ、書いてみるよ！

……えーと……、でも、どうしよう？ 僕、本当にろくな正
体が思いつかなかったんだけど……」

『誰か助けてくれる人がいるといいんだけどな。俺はもう……、
限界……』

「わあ~~~~っ！！ まだ寝るな！！

えーと、えーと、誰がいる！？ 誰がみんなの納得する「真犯人」
の「正体」を知っている！？」

『書けそうなのは……』

浩樹もハッと思いついた。

「倉岳拍子！……」

『かもな。……じゃ、頼んだぜ？ 生きていたら、また明日学校で
会おうぜ……』

「大介君？ 大介君！？」

大介は通話を切っていた。浩樹はもう一度かけ直そうかと思った
が……

「時間がない……」

本当に新たな「真・無形人間完結編」を書くことで大介が助かる
のかどうか分からないが、なんだか浩樹までそうしなければならな
いような気になってしまっていた。

「倉岳拍子。頼む、答えてくれ！」
浩樹は急ぎ、「倉岳拍子」宛の「メッセージ」を打って送った。

21、ヘルプ！

倉岳拍子は更新の具合から見てだいたい8時から11時の間パソコンに向かっていてと思われる。長期連載している「霊能力者姫宮魅智」赤神村」は毎週月曜から金曜午後7時に更新されているが、これは前日に掲載予約しているものと思われる。更新の速さからほぼ毎日パソコンで執筆作業していると思われる、まず「小説家になるう」のマイページを開くだろうから、……現在8時20分……、これからパソコンに向かってくれればメッセージの到着に気づくはずだ。

8時30分。浩樹はじりじりしながら倉岳拍子の返信を待った。その間に「真犯人」の正体を今一度考えてみたが、思いつくのはろくでもない子どもっぽいものばかりだった。

8時35分、倉岳拍子から返信が来た。

▼倉岳拍子

件名：今晚は。

今晚は。何か緊急の用だそうですが、なんでしょう？

浩樹は、しまった、待っている間に詳しい事情を書いたメッセージを送っておけばよかった、と後悔しながら急いで次のメッセージを打った。

▼リュウ・ライター

件名：無題

「真・無形人間完結編」を書いたのは僕の友人です。消去されて、友人は自分も「真犯人」に殺されると本気で怯えています。彼を救うために倉岳さんが「完結編」を今すぐ書いて更新してくれませんか？

浩樹は、そうだ、倉岳本人に書かせればいいじゃないか？、と考
えてそう送った。

▼倉岳拍子

件名：無題

わたしは嫌です。殺されたくありません。ですが……
あなたの友人とは「ディープ・レッド」さんでしょうか？

やっぱり完結編作者がディープ・レッドであるのはお見通しだ。

▼リュウ・ライター

そうです。彼は僕のクラスメートで、僕の唯一の親友です。彼は
本気で怯えています。どうか助けてください。お願いします。

▼倉岳拍子

残念ながら、わたしの調べたところでは完結編作者たちが「真犯
人」に殺害されたのは事実のようです。わたしは自分の短編作品で
これ以上の被害者が出ないようにメッセージを送ったつもりでした
が、このようなことになり残念です。ディープ・レッドさんの素晴
らしい完結編を読んでこの「正解」ならばと期待したのですが……。
ディープ・レッドさんは誰かが次の完結編を書けば自分は助かると
考えているのですか？

▼リュウ・ライター

そうです。作者たちはただ書いたから殺されたのではなく、正体
を否定されて「削除」されたから殺されたのだと考えています。

▼倉岳拍子

なるほど。さすが鋭い読みです。

では、提案です。

わたしは自分で完結編を書く気はありません。わたしは実はひどく臆病な人間で、現実の危険は極力避けたいのです。

あなたが危険に立ち向かい、友人を救う覚悟があるなら、

わたしの作成した「メモ」をあなたに差し上げます。

メモはしょせんメモですから、あなたの文章で作品に仕上げ、あなたの作品として公開してください。

よろしいですか？

▼リュウ・ライター

了解しました。よろしくお願いします。

しばらくして、倉岳拍子から送られてきた「メモ」は倉岳拍子版「無形人間」完結編の概容は、次のようなものだった。

22、「無形人間」無形バージョン

犯人は「形の無い人間」である。

「形が無い」とは個人としての個性が全く無いことであり、のつぺらぼうのような人間である。

何者か？——個性を漂白された人間である。精神的にも肉体的にも。

大戦中の軍の実験はやはり精神操作の研究であつたと思われる。

——その結果何が生み出されたか？ モンスター？

精神作用〃〃〃テレパシー。どんな能力？

恐ろしい人体実験↓人間性の破壊。人間性の破壊された人間。人間性を破壊するモンスター↓×ありきたり。

人間性を吸収してしまうスポンジのような人間。↓。

60年以上地下で生きていた↓×リアリティー無し。

新しく作られたモンスター。誰？ 引きこもりの妹？ サイコの母親？

謎の入院患者。これまでの謎と関連が薄い。?????

謎の入院患者〃妹。妹〃謎の入院患者〃スポンジ人間。家族は

気づかない？ 気づかない。父親だけ。事情を知っている。モンスターを作ったマッド博士。洗脳された？誰に？ 生き残りの老人？ ↓ ×

地下の「無形人間」。無個性、非人間性。人間ではない「物」になっている。

どんな「物」？ ミイラ？ ↓ ×

どんな「物」？ マシン。 ↑ 逆転。人間性を持ったマシン。コンピュータ？ 当時は？

マシンⅡ 当時の実験記録。書類ではない別の形。五感のレコード。脳波……… 立体的……… 3D脳波。

人間の脳内活動の外部への記録。さらにその「記録」の別の脳へのリバース。

脳から脳へのデータの転送Ⅱテレパシー。

転送データが残っていた？ コンピュータのような洗練された機械ではなく、「アナログ」の物体。

地下室の存在を知っている人物。老人 理事長。院長に目星をつけ、意図的に「機械」に触れさせる。「データ」を脳内に埋め込まれ、院長はマッドサイエンティストに。 / 理事長の目的 特になし。単なる昔の実験の完成。古い先短い年寄りの意地悪な好奇心。

で？

現在の「無形人間」の正体は？

大容量コンピュータチップ（↑現代の最新科学。コントロール装置）を埋め込まれた「誰か」。↑実験体。正体は……どうでもいい。妹と入れ替わるのだから似た体型。女？男？どっちでもない？↑出所はやっぱり危ない医療機関。家族から「処理」してほしい問題のある患者。

現在進行形の実験の目的　テレパシーで操る人間のロボット化。
その目的……軍事？政治？↓利用者のお好きなように。技術の完成が実験の目的。

「スポンジ人間」は？

「対象」に触れるとその「脳内データ」にアクセスして吸い取る。
（指先に神経が露出、視神経に触って脳へさかのぼる）

「脳内データ」を吸い取られた者は無個性」「誰でもない」になつて、自分という存在にジレンマ。

廃車ならぬ廃人。丸めてスクラップ。（いずれ再生利用するつもり？狂った精神的論理。）〓筋肉抵抗がすっかり無くなっているから簡単？むしろ協力的？

吸収した「脳内データ」を現在はコンピュータにデジタル保存。
↓実験体は再び「無形人間」に。

「無形人間」はやはり女。若い女性の入院患者を襲ったのは実験の成功しやすい似たタイプを狙った。

第一の被害者は妹。第二の事件の数ヶ月前に実験。幸い？未完成でアクセスが未熟。完全に個性を吸われ尽くすことはなかったが、廃人同様。実験体に少し妹の個性が残ってしまったっている。

「完結編」決着の付け方は？

刑事↓地下で院長と対決。「素晴らしい」実験の内容を聞かされる。パラノイアめ。

院長は言葉巧みに刑事に「機械」に触れさせようとするが、一方で「無形人間」が刑事に「アクセス」しようと迫る。

「無形人間」が「機械」にアクセスしてしまう。↓マッドサイエンティスト第2号に。↓刑事に申し出。犯人は自分で、逮捕してかまわないが、その前に院長と理事長にアクセスさせてほしい。↑逃げないという保証は？↑「必要ない。逮捕されるとき、わたしはわたしではなくっている。逮捕されるわたしは、院長か、理事長か、それとも、その融合体だろう」↑「無形人間」自身はどうなる？↑「わたしは元々「無」であるから、「無」に帰るだけのことだ」↑刑事了承。

「無形人間」は院長にアクセス。院長は「誰でもなく」なって、生命機関がストップ、息を引き取る。

「無形人間」は理事長の元に向かい、

↓後日出頭。少女の姿をした老人。

END

追伸：

完結編を更新したらログインパスを変更し、もう君以外作品に触れられないようにしたまえ。

また別の「新・無形人間」が開設される危険もなくないが、おそらく、これ以上完結編を書こうという作者は現れないと思います。では、頑張ってください。

23 夜明けの悪夢

なんだこれえ！？

この人の頭の中こそどうなってるんだ！？

浩樹は思わず悲鳴を上げたくなった。こんな物いつたいどうやって「作品」にしたらいんだ！？

生々しく人の頭の中を覗いたような気がして、気持ち悪くなった。きちんとした「あらずじ」にもなっていない「メモ」だからなおさら生々しい。

こんなパラノイアのモノマニア、とても自分にはまともな文章にできないと思った。

大介はどうしているだろう？

電話してみようかと思ったが。

妄想に取り憑かれて怯えきっている大介にんと言っていていいから分らない。

浩樹は嫌々ながら「メモ」に向き合った。

「テレパシー」で操っているところなんか大介の書いた完結編と共通している。倉岳は大介の完結編を読んでこのメモを作ったのだろっか？ いや、この考えが行ったり来たりしているところは、考え考え、いかにもそのまま記していったような感じだ。同じ材料から答えを求めているので似通った物になるのも自然かも知れない。大介のは完成した物語としてすつきりしているが、こちらはまだバラバラのメモの状態で、とっちらかって、理解しようとする頭がぐちゃぐちゃになりそうだ。

浩樹はため息をつき、それでも

『やってみよう』

と思った。

とにかく大介を救うため、

浩樹は学校の宿題も予習も放り出して完結編執筆に没頭した。

どうまとめたらいいいのかわかりながら、自分なりの想像を働かせてなんとか文章にしていた。

時刻はとつくに真夜中を過ぎ、丑三つ時になったが、疲れて眠りたいのに、頭の芯が冴えて全然眠れそうにない。カタカタとキーボードを打つ音が響き、周りの静けさが際だつ。眠気覚ましにインスタントコーヒーを入れたが、いつの間にか忘れ去って半分以上冷たくなっていた。

すっかりカーテンを透かして朝の光が射し、浩樹は、

「終わった……………」

ENDマークを打ち込んだ。

ふうーーーー……………、と息をつき、大介に電話して教えてやろうかと思ったが、もうとつくに眠っているだろうと思ってやめた。まったくなんのためにこんなに苦労して他人のアイデアで途中からの小説なんか書いているんだろう？と思ったが、ま、これも友情の証だ。明日（とつくに今日か）大介がこれを読めば感動してくれるだろう。（それともすっかり元気になっていらぬ批評を加えてくれるかな？）

浩樹は書き上げた文章を「更新」して、おっと危ない、と倉岳のアドバースを思い出してログインのパスを「GOODDAY」に変更した。

ふわあ……………あ……………、と大あくびして、さてギリギリ7時過ぎまで2時間ばかり眠ろうかと思つて、目覚まし時計をセットして、ベッドに入った。

ジリリリリリリ、

とベルの音で目を覚ました。もう時間かと思ったが、なんだか目覚ましの音がいつもと違うように感じた。異様に響きが深くて、ビリビリ金属板に反響しているような感じがした。

浩樹は急に嫌な感じがして目を開けた。目を開けた途端ギョツとした。

部屋が赤かった。

錆の赤で全体が汚れている感じがした。

部屋が変貌していき、別の部屋になっていく。

固いコンクリートに覆われた、冷たく、湿って、かび臭い部屋に。

「リリリリリリリ」

というベルの音が、遠く廊下の先から響いてきている。

浩樹の心臓はドキンドキンと外に音が漏れ聞こえるほど大きく速く打って、喉元にせり上がってくるように気持ち悪かった。

浩樹は恐る恐るベッドの上に起き上がった。白い、汚れた薄い布団を掛けられている。

どこなのだろうここは？と思って、その部屋を知っているように思った。

カツ、カツ、カツ、と固い靴底が廊下を打って、近づいてきた。

浩樹は目を見張って、グリーンの鉄のドアを凝視した。

「ギーイーイー」

音を軋ませてドアが開かれた。

浩樹は血走らせた目に涙を浮かべ、いやいやと首を振った。

白い人間が立っていた。

のつぺりしたまるで個性や、感情のない顔をして、色もなく、眉毛も、まつげもなく、ガラス玉のように見開いた目はまるでまぶたが付いてないようだった。男なのか女なのかも分からない。年齢は10代後半に思えるが、分からない、子どもっぽくもあるし、年寄りのようでもある。背はごく平均的で、無個性だ。

髪の毛もなく、耳の付け根に赤い大きな手術跡があった。

年齢性別不明の人形のような人物は、右手を伸ばして、浩樹に近づいてきた。その人差し指の先が赤くごにごによしているのを見て、浩輝は泣きながら引きつけを起こしそうになった。

「ちっ、違うんだ！」

浩樹は指を目に近づけられて、必死に言った。逃げたくても座りながら腰が抜けてしまっている。

「ぼっ、僕じゃないんだ！君を作ったのは！きっ、

君の生みの親はっ、

倉岳拍子だ！

ぼっ、僕は彼のアイデアをパクッただけだ！」

無表情の白い人間は、何か考えているのかどうかも分からないが、ストップし、人差し指を突き出していた右手をパーにすると、ペタッとして浩樹の額に触った。

「ひいひいー……………」

浩樹は震えて目をつぶった。冷たい汗をいっぱいかいているような感覚が気色悪かった。

手が離れた。まだ目をつぶって震えている浩樹の耳に、リリリリリリ、とベルの音が響き、その音が変化していった。

「ジリリリリリリリリリリ！」

ハッと目を覚ました浩樹は、

「わあっ！」

と、ベッドから転げ落ちた。

自分の部屋で、二度寝しないように本棚の上に置いた目覚まし時計がけたたましく鳴り続けていた。

「夢……………」

浩樹は、は、はは、ははははは、と情けなく笑った。

「夢落ちなんて、最低じゃん……………」

ひどくだるくて、全身ぐっしり寝汗をかいている。

最低だ、と笑いながら、夢の中で「倉岳拍子」の名前を覚えてしまったことに、ひどく罪悪感を覚えていた。

夢の中のことだ、と思いながら、いわば恩人を売った自分の心が情けなくてしょうがなかった。

うるさく鳴り続ける目覚まし時計を止めると、まるで世界が止まってしまったような気がした。

24 最低のオチ

7月×日。

今日未明、新潟県。市のトンネル内で。×市の工場従業員 山口濱治さん（36）が遺体で発見された。遺体の損傷が激しく、山口さんは現場から40キロ離れた自宅近くの工場へ徒歩で早朝出勤する途中、車に引っかけられ、遺体発見現場までそのまま引きずられていったと見られる。詳しい状況を県警が捜査中で、山口さんを引きずってきたと見られる車両の発見に務めている。

休み時間、大介は携帯電話で浩樹の書いた「真・無形人間完結編」を読んで、大喜びした。

「おおっ！ すっげえー！ 面白れえじゃん！ 浩樹君、やったな！、傑作じゃんか？」

すげえすげえと大喜びする大介を、浩樹は思いつきり寝不足でしわしわした目でムスツと眺めていた。

「なんなんだよ？」

浩樹は思いつきり不愉快に大介をなじった。

「大介君、君、なんでそんなに元気なんだよ？ ていうか、なんで

生きてんだよ？」

「悪い悪い」

と、全然悪びれずに大介は謝った。

「いやあゝ、浩樹君が頑張って書いてくれたおかげかなあゝ？
すっかり快眠して元気はつらつになっちゃったよ。はっはっはー」

白々しい大介の態度に浩樹の機嫌はますます悪くなっていく。何を言いやがるか、朝登校してくると先に教室にいた大介は浩樹に開口一番、

「よっ！、おっはよおー、大先生！」

と、思いつきり上機嫌に挨拶したのだ。昨夜殺されかけて？ベそをかいていた奴の顔か！？

どうやら担がれていたようだ、と考えざるを得ない。

「真・無形人間」のイベントもすっかり下火で、頭のいい、大介はもう一盛り上げてやろうと企てたのだろう。更新も削除もコメントの書き込みも誰でも自由自在なのだから！

大介はあっけらかんと笑っている。太った頬がてかてかと実に健康的だ。

「まっ、いいじゃないか。いや、マジでさ、傑作だと思うぜ？
こんな精神のねじれまくった暗黒小説、よく書けたよな？ いや、脱帽だ。はっはっはっは」

浩樹は暗い瞳で、

こんな奴、絶交してやる、と思った。

倉岳拍子よりのメッセージ

いやあ、ごめんなさい。

えーと……、全部説明しますね。

わたしたち、みんなグルです。

えーと、「桐山容堂」をお気に入りにしていた作家たち、全員です。

すみません。君を除いて。

えーとですね、

言い出しつぺはわたしです。ごめんなさい。

桐山容堂さんがあんなことをしたものだから、ちよつと腹が立ちまして、盛り上げるのと一緒に、ちよつと困らせてやろうかと悪巧みしまして、

さつそく「逆お気に入りユーザ」にリストされた作家さんたちにメッセージを送りました。チームを組んで盛り上げませんか？と。ところが君の場合……

桐山容堂個人にメッセージを送っていたでしょう？

真面目なファンだなあとって、悪巧みに誘うのに気が引けちゃ

いまして。そうしたら「ディープ・レッド」君が、君を自分のクラスメートの友人だと教えてくれまして、申し訳ないんですけど君には観客役を引き受けていただこうかと……。

「カンニング・レクサー」も「星輪クラリス」も「無名のモンスター作家さん」も、それぞれホラー常連作家たちの変名です。それ以外の作家さんの作風を真似したりして楽しんで書いておられたようですが。お察しの通り「無名さん」は「ジェイソンXYZ」さんです。彼はそのまんまですね（笑）。

それぞれにひどい悪口の感想を送っていたのも、大半は我々自身です。一般の読者さんたちはなかなか評価したり感想送ったりしてくれませんからねえ？ その目的はこれをイベントとして盛り上げるためです。ひどい手口でしたが、アクセス数を見る限り成功だったと威張ってもいいんじゃないでしょうか？

あ、わたしの書いた「悪魔の未完小説」は、言うまでもなくでっち上げです。すみません。

もちろん「ジェイソンXYZ」さんも左右揃ってピンピンしています。そうそう、彼のユーザページを「炎上」させるのは苦労しました。単純に物量作戦でしたからね。一番積極的に参加してくれたのはジェイソンXYZさん本人です。それは俺の役回りだろうと、自ら立候補してくれました。

「桐山容堂」のユーザページをジェイソンXYZさんにクローズしてもらったのも、「霧山洋堂」の名前で「真・無形人間」を開設したのもわたしです。これはよりイベントを盛り上げるのと、本家桐山容堂に対する嫌味です。自分の作品投げ出してどうするんだよお？。ねえ？

元のユーザページのログインパスはこっそり元に戻しておきまし

た。

そうだ、このイベントは君と「ディープ・レッド」君の競争でもあったんですよ？

君に渡したメモは同じ物をディープ・レッド君にも渡していました。彼にはたつぷり時間があつたので有利でしたね。アイデアを整理して、自分なりの設定を盛り込んで分かり易く面白いエンターテインメントに仕上げていました。

「リュウ・ライター版完結編」もわたしは好きです。きっと君にとっては時間がなくて不意だったと思いますが、科学者の狂気が生々しく出ていて、なかなか迫力があつて怖かったです。ありがとうございます。

ああ、念のため言い訳させてもらいますと、君にも書いてもらったのはディープ・レッド君の要望ですからね？ わたしは彼の「お芝居」におつき合いしただけです。クレームは彼にたつぷり付けてください。

さて。

まあこのイベントもここらが潮時でしょう。

「霧山洋堂」のページはわたしが開設した物ですから（本家には無断ですけれどね。丸投げしちゃってるんですから、いいですよ？）これまでに発表された「完結編」をそれぞれ独立した作品として収録し直そうと思います。もちろんディープ・レッド版も、リュウ・ライター版も、よろしいですよ？

というわけで、変更したログインパス教えてください。

君を本気にさせるために余計な手間になっちゃったなあ（笑）。

これで、ねえ？ 本家さんがちゃんとした完結編を書いてくれればいいんですけど、ねえ？

奮起を期待して待ちましょう。

それではまた。

リュウ・ライターさんの新作も楽しみにしています。

25 「コンパスの支点と円」

「コンパスの支点と円」 作者：リュウ・ライター

コンパスで描いた円には中心に紙に針を突き刺した穴がある。

正確な円を描くために欠くことの出来ない大事な支点なのに、描かれた円とその中心の点は永遠に交わることはない。

円周の線上に存在する無数の点たちは等距離で中心の支点を眺めながら、自分たちが足蹴にした彼を笑って眺めている。

彼らは仲良くサークルを組んで、点を取り囲み、笑い物にする。

彼らは一つの意志を共有し、空間を電波で結び、テレパシーを有する。

テレパシーで結ばれたきれいなサークルは、

いったん

中心の支点がテレパシーをキャッチしてしまえば、

円周の線は乱れて、

切れて、

全ての点が支点である「穴」に頼って1本の線になる。

「穴」は知ってしまった。

自分を取り囲んで笑い物にしていた者たちの存在を。

「穴」は1本の線に連なった者たちを順番にたぐり寄せる。

まず1番近い点を。

そつだよ、おまえのことだよ。

今夜おまえのところに行くからな。

なーんちゃって。

(笑)

.....

26 笑えないオチ

「ちょっと怖えーよ。一瞬マジかと思ってビビっちゃったじゃんか？」

大介は笑いながら、まだちょっと疑った引きつった顔をした。浩輝はすまして、

「ふん。作品で騙された恨みは作品で晴らしてやったんだ。フェアだろう？ 少しは反省したか、友だち甲斐のない薄情者め」

と言つてやった。大介は手を合わせて浩樹を拝む。

「悪い。悪かった。純粋な君の心をもてあそんだ俺を、どうか許してくれたまえ！」

「もてあそぶつて、なんか気持ち悪いなあ」

「へへへへ。機嫌直してくれよぉ〜？ 我が親友よ！」

「うざりたいよ」

と言いながら、本心ではけっこう悪く思っているらしい様子に満足して大介を許してやることにした。

「まあいいや。考えてみればけっこうドキドキして楽しかったもんね。本当にホラー小説の主人公になった気分になれたし。ところで倉岳拍子が……さ………」

浩樹は朝登校してきてから大介を無視して自分の席でつんとすましていたのだが、大介がニヤニヤご機嫌を取るような顔でやってきて、浩樹の前の席を拝借してこちらを向いて話し出したのだが……

…。

「うん？ 倉岳拍子がどうした？」

浩樹は大介の頭の上を見て、口を半開きになっている。

「え？ なんだよ？」

シュツ、と腕が振るわれた。

「え？ 何？」

ギョツとしたまま固まっている浩樹の様子に大介はまだニヤニヤ笑っている。どうせまだ俺を脅かそうって言うんだろ？と。

あちこちで異変に気づいて、教室中から急速に話し声や笑い声がフェードアウトしていく。

「なんだよう？ いつまでそんな顔してんだよお？」

「だ、だ、だ、大介……くん………」

「ええ？ なに？」

ニヤニヤ笑う大介の額に、生え際から、つーっつと、太く、真つ赤な線が垂れた。

「い、………痛く………ないの……？」

「ええ？ 痛い？ 何が？」

と言いながら、ようやく大介は鼻の先からぼたっと落ちた血液に気づいて、

「なんだあ？」

と、指で押さえ、後から後からぼたぼた滴ってくる真つ赤な液体に次第に恐怖し、頭の違和感に気づいた。

「あ………な、なに………い、イテ………」

さっきからずつと蒼白の顔で固まって上を見続けている浩樹の視線に、恐る恐る振り返った。

「う、うわわわわわあゝゝっ」

大介は椅子をガタンと鳴らしてひっくり返りそうになった。

大介の後ろに、ものすごい顔をしたクラスメートの女子が立っていた。

その手にカッターナイフが握られ、大介の頭から床に、ぼたぼたと、大量の血液が流れ落ちていく。

「うっ、うわあああ~~~~っ!!」

「キイイイイイイ~~~~」

と、その女子は食いしばった歯の間から奇声を発し、再びカッターナイフを振り上げた。

教室中に一斉に恐怖の悲鳴が上がった。

大介は悲鳴を上げて床に転げ落ちて這いずり、浩樹はもう、恐ろしさに固まって何も出来なかった。

その女子は奇声を上げて更に大介に斬りかかろうとし、

周りの男子が慌てて女子を羽交い締めにし、その手から危険な力ツターナイフを取り上げようとした。

「放せえええ~~~~っ!! うわああああ~~~~っ!!
! 殺してやるうっ~~~~っ!!

この、

ブタ野郎おおお~~~~、

うわああ、ぎゃあああああああ~~~~!!~~~~!!」

女子はものすごい顔でわめいて、暴れた。

浩樹は、その狂気の据わった目が恐ろしくてならなかった。
教室は阿鼻叫喚の騒ぎになり、

大介は床で泡を食いながら、ようやくズキンズキンと切られた頭が痛み、

「し、死ぬっ、お、俺、出血多量でショック死する~~~~」

と、およそ死にそうにはない顔でぐずぐず泣いた。

騒ぎに教師が駆けつけ、怒鳴り声がかましくなられた。

切られた大介も、浩樹も、そのクラスメートの女子が何故突然このような凶行に及んだのか、さっぱり分からなかった。

27 | 最終章 の真実。

片山恭輔は呆れ返っていた。

誰あるう、「桐山容堂」その人である。

.....

なんだあのイカレた最終章は？

世の中けつたいなことを考える奴がいるもんだなあー。よくやるぜ。

ああ、そういえばこんなのがあつたつけ、と思ったのだ。

去年「アルファポリスホラー小説大賞」というのにネットで書いていた小説を応募してみたが、大賞どころか候補作にも選ばれやがらなかった。フン、見る目のない奴らめ。すっかり興味をなくして講義の方が忙しくなつてしばらく休むつもりがそのまま忘れ去つちまつたぜ。

ああ、俺は24歳の某有名大学英文学科の院生だ。えーと、この「小説家になろう」？の登録プロフィールは親父の物だ。こんなもの、誰が正直に自分のなんて書くか。

この…なんだ、「無形人間」…だったか、

忘れ去っていたには理由がある。

同時期に某大手出版社のミステリー文学賞に応募していて、残念ながらこちらでも大賞こそは逃したものの、編集者にコネが出来て、プロとしてミステリー誌にデビューすることが決まったのだ。フフン、今さら素人どもに混じって見る目のない三流読者相手に書いてられるかってんだ。

と、まあ……、忘れたというより無視していた昔の作品だが、ちょうどプロデビューが決まった頃アルファポリスから今年の「ホラ小説大賞開催」の案内メールが来た。
今さらまったく興味なんてないんだが……

そうだ、

と俺は実にミステリー作家らしい「イタズラ」を思いついた。
今さらどうでもいい過去の作品を、低レベルな三流作家どもに開放してやるのだ。解決編に入ったところでブツ切れになってるからちようどいいだろう。

さあて、三流作家どもが食いついてくるか？ どの程度の「解答」を答えてくるか？、ま、お遊び感覚で見てもやろうと思った。

ああ、元々ページを開設するためのメールアドレスはフリーメールを使っていたのだが、イタズラついでに担当編集者のメールアドレスに書き換えておいた。最近変なメールが紛れ込んでいて困るなんてばやいていたが、まあ、じきにばれた。いいじゃないか、俺に熱心なファンがいるって分かっただろう？ 純朴な「竜雷太」君。ばれちゃったんで適当な捨てフリーメールに書き直しておこうかと思ったら、勝手にパスを書き換えられて俺までログインできなくなっちゃまっていた。世の中悪い奴がいるものだ。

と思っていたら「真・無形人間」なんてのが新しく開設されて、「無形人間」イベントは継続された。世の中暇人が多いことだ。

しっかしまあ、
ろくつでもねえ「完結編」だなあ。どうしてこうなるんだか……
ハア……。

ま、所詮素人に書けるのはこの程度というわけだ。

おい、編集さん、世の中の「作家」たちのレベルが分かったらどう？

あの続きを知りたいか？

あれはねえ、真犯人は実は……………

以降「真相」が分かりませんのでこれにて「更新されていません」はおわりとさせていただきます。あしからず

おことわり

この作品を書くにあたって約一名と約一作、（かなり）具体的にモデルにさせていただきました。遅ればせながらここに無断登用したことをお詫びいたします。ごめんなさい。

実際の「作者」様はこんな高慢な嫌な人間ではないと信じております。

謝るからさあ〜、

「続き」書いてよお？

ひつどいじゃない、あんなところで中断なんて。ねえ？

誰？ 真犯人は？

いったいどういうことなの？
教えてよお、ねえ？

お願い！

ね？

ほんとに

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0796s/>

更新されていません。

2011年4月23日09時10分発行